

近世在郷町における祭礼の成立と展開

宇野功一

下総国佐原村本宿の豪家・村組・町

The Establishment and Development of a Festival in a Rural Town during the Early Modern Period: on the Case of Honjuku in Sawara-Mura, Shimousa

はじめに

- ① 佐原村の概要
- ② 祇園祭礼の成立
- ③ 祇園祭礼の展開
- ④ その後の祇園祭礼
むすび

【論文要旨】

近世下総国香取郡佐原村は利根川舟運の一拠点として江戸時代を通じて栄えた。元禄八（一六九五）年にはすでに町場が広く形成されて在郷町となっており、元文五（一七四〇）年には三八一九人もの人口を抱える関東でも有数の大村となっていた。この村は本宿と新宿という二つの地域に分かれていた。本宿はさらに三つの（実質的には二つの）「組」と呼ばれる社会的・地域的集団に分かれ、経済的發展を背景に組内には「町」が形成されていた。

この本宿でなされる祇園祭礼を例に、近世在郷町における祭礼の成立と展開の一例を示した。本宿にはもともと祭礼といえるほど規模の大きい祭りはなく、本宿総鎮守の天王社によって六月に浜下り神事と祇園神事という二つの神事がおこなわれていた。これを実際に主導したのが本宿の有力者で、それぞれ二つの組を代表していた二つの家の当主である。ところが元禄一六（一七〇三）年から、両神事が統合されて御旅所

への逗留と神輿の巡行（行幸と還幸）が加わり、一続きの祭礼が成立した。これが祇園祭礼である。

祇園祭礼は次第に整備されていった。とくに明和四（一七六七）年に還幸の範囲が本宿全町に拡大すると、翌年から町々では山車などの練り物を本格的に出すようになり、祭礼の規模は拡大した。しかし神輿行列に付ける練り物の順番をめぐって町間で激しい対立が生じた。最終的には練り物行列が神輿行列を先導する形で一つの大きな祭礼行列が形成された。この対立の過程で町々は組の統制を脱した。その結果、二つの神事の運営は引き続き有力者が、二つの行列の運営は町々がおこなうという形式が文政五（一八二二）年までには確立されたと考えられる。組を単位として村内の有力者が主導していた神事に神幸が加わり祭礼化した結果、村内に成立していた町々が祭礼行列の運営主体となっていたのである。

はじめに

近世都市祭礼にかんする近年の研究動向について、渡辺康代は二つの流れがあると指摘している。「三都やそれに次ぐ規模を備える地方都市の祭礼から、幕府や藩が都市に及ぼした政治性を読み解こうとする研究の流れがある一方で、より小規模な町における祭礼や芸能の担い手、運営方法および形態から、近世の町やそれを取りまく地域社会の特性をみいだそうとする視点がある」〔渡辺二〇〇二・二五〕。

実際には史料の残存状況の問題などから、三都や城下町など政治中枢都市の祭礼にかんする研究に比べ、在郷町や宿場町など小規模都市の祭礼にかんする研究はまだその蓄積が少ない。本稿は、後者の流れに分類される研究である。対象とするのは、現在の千葉県佐原市の本宿地区でおこなわれている祇園祭礼である。

千葉県佐原市の中心街は明治時代に「佐原イ」と総称されるようになった区域で、利根川に流入する小野川の下流を挟んで東西約二・五キロにわたって広がっている。この区域が近世の下総国香取郡佐原村にほぼ相当する。近世初頭以来、小野川の東岸部を本宿、西岸部を新宿と称している。

近世の佐原村には村全体の総鎮守はなく、本宿と新宿にそれぞれの総鎮守があった。本宿の総鎮守は牛頭天王社（明治初期に八坂神社と改称されたが、以下、天王社という）で、新宿の総鎮守は諏訪明神社（以下、諏訪神社という）である。天王社では六月一二日に祇園祭礼が、諏訪神社では八月二七日に御射山（みさやま）祭りに由来する祭礼（以下、諏訪祭礼という）が、それぞれの氏子によってなされていた。

今日では祇園祭礼は新暦の七月に、諏訪祭礼は新暦の一〇月に、ともに三日間の日程でおこなわれている。両祭礼とも町ごとに「屋台」と呼

ばれる四輪で二層構造の山車が一台出され、祇園祭礼では一〇台、諏訪祭礼では一四台を数える。屋台は上層部（露台）に人形などの巨大な飾り物を載せ、下層部（囃子台）に「下座」（または芸座）と呼ばれる一〇人前後の囃子方を乗せ、引き手によって綱で引かれて運行される。ときおり屋台を止め、そのままで多数の引き手が下座の囃子に合わせて踊る。両祭礼とも、屋台の豪華さとその数の多さ、囃子の美しさによって関東屈指の祭礼とされている。

佐原村は農業地帯のなかで交通の要衝に位置し、物資の集散と人口の集中によって都市化した、いわゆる在郷町の一つである。本稿では在郷町の祭礼のあり方の一例として江戸中後期の本宿祇園祭礼を取り上げ、その様相と変化について詳細に記述していく。江戸中期の本宿に居住していた二人の祭礼当事者がそれぞれ克明に日記をつけていたのはじめ、祇園祭礼の近世史料は豊富なため、この祭礼は成立過程とその後の展開過程がかなりの程度正確に知られる、きわめて貴重な例である。

祇園祭礼の形態や運営方法とそれらの変化は、佐原村内部の特徴と変容を反映したものとなっており、祭礼と在郷町社会の関係を考えるうえで示唆に富むものである。

行論にさいして注目すべきは、近世初頭から佐原村に存在していた「組」（これについては①を参照）を基盤として村内豪家が神事を主導していた状態と、それについて村内（組内でもある）に遅れて成立した個別の町々が漸進的に付祭りを発展させていった過程である。付祭りとは、神事に付属させる形で、氏子が神を歓待するためにおこなう芸能などのさまざまな賑やかしのことである。

天王社の神輿が氏子園を巡行（神幸）する形式は元禄一六（一七〇三）年六月に始まった。これをもって、従来から六月になされていた二つの神事を統合させる形で祇園祭礼が成立したとみなしうる。

それから徐々に、御旅所、神幸の順路、神輿行列の構成といったもの

が整えられていった。そして明和四（一七六七）年に神幸（厳密にはそのうちの還幸）の範囲が本宿全町に拡大されるにおよび、翌年から氏子各町は付祭りとして本格的に練り物を出すようになった。練り物とは、仮装や囃子などの芸能、または笠鉾や山車といった作り物のことである。しかしこれを機に、還幸のさいの神輿行列の先頭をめぐって町間で激しい対立が生じて豪家や村役人（組役人）の統制も利かない事態となった。問題は、各町の練り物をどのようなやり方で神輿行列に組み入れるかということであった。激しい対立を経て、明和七（一七七〇）年に従来の神輿行列とはべつに練り物行列が成立した。練り物行列は年ごとに一つずつ各町の並び順を繰り上げる方式で成立した。これを神輿行列に先行させ、全体としては二つの連続する行列が一つの大きな祭礼行列を形成することになった。

そのうち、文政五（一八二二）年までに現在のそれとほとんど変わらない年番制度が確立され、それにもとづいて神輿行列と練り物行列のそれぞれが各町の持ち回りで監督されることになった。

ところで、両祭礼についてはこれまで参照するに足る文献がほとんどなかったが、近年『佐原山車祭調査報告書』が刊行され「佐原市教育委員会編二〇〇二」、ようやく研究の下地が整ってきた。これには主要な近世史料（一部は明治初期の史料）、現状調査を中心とした五編の報告それに多くの囃子の楽譜が収録されている。史料編は今後の両祭礼の歴史的研究の基礎となるもので、すでにこれにもとづく簡便な通史を含む書物も刊行されている〔清宮二〇〇三〕。

もちろん本稿でもこの史料編を大いに利用する。ここで、本稿で言及する史料のうち、主要な七点について説明しておく。

①「部冊帳 前巻」。本宿組の有力者であった伊能三郎右衛門家の六代目当主景利（一六六八―一七二六）の著。景利は元禄七（一六九四）

年から正徳三（一七一三）年まで本宿組の名主を勤め、退役後も元名主として本宿組に重きをなした人物。

この著は正徳四（一七一四）年に成立したもので、天正年中（一五七三―一五九二）から正徳四（一七一四）年までの佐原村とその周辺村落にかんする村政記録であり、全一二巻と別の一巻から成る。自家および他家に伝わる古文書・古記録を博搜し筆写するなどして編集したもの。いったいに古い時代の記事ほど取り扱いに注意を要するが、近世の佐原村の歴史を調べるうえでは欠かすことのできない史料集である。次の刊本を利用する。

佐原市史編さん委員会編 一九九六 『佐原市史 資料編 別編一部冊帳 前巻』佐原市。

なお本稿では、以後も原題どおりに「部冊帳 前巻」と表記する。

②「部冊帳 後巻」。前記の景利が「部冊帳 前巻」のあとを受け、正徳五（一七二五）年から享保一〇（一七二五）年までの出来事について同時進行の形で毎年記録したもので、信頼性はきわめて高い。原本は一巻本であるが、二冊に分けられている次の刊本を利用する。

佐原市史編さん委員会編 一九九七 『佐原市史 資料編 別編二部冊帳 後巻二』佐原市。

佐原市史編さん委員会編 一九九八 『佐原市史 資料編 別編三部冊帳 後巻二』佐原市。

なお刊本に合わせて、以後、本稿では「部冊帳 後巻二」および「部冊帳 後巻二」と表記する。

③「景利日記」。前記の景利の私用日記で元禄一一（一六九八）年から享保一〇（一七二五）年までの二〇巻から成る。

ただしこの期間のうち、以下の日記は現存しない。元禄一二（一六九九）年から同一四（一七〇二）年まで、宝永五（一七〇八）年、正徳二（一七二二）年から同四（一七二四）年まで、享保元（一七一六）

年。また元禄二一（一六九八）年の日記は三月までしか、宝永八（一七二五）年の日記は六月までしか書かれていない。

この史料は従来の祇園祭礼の研究では実質的にまったく利用されていなかったものだが、貴重な情報が多く含まれている。さらに刊本もないので、日記中の祭礼関係の記事をできるだけ多く引用する。

本稿では伊能忠敬記念館蔵の複製本（資料番号R—二—一からR—三—三）を利用する。

原題は巻ごとに異なるが、以後、本稿では「景利日記」と一括して表記する。

④「豊秋日記」。伊能三郎右衛門家の分家に当たる伊能七郎右衛門家の豊秋（？）一七七二の私用日記。宝暦六（一七五六）年から明和七（一七七〇）年までを収める。ただし宝暦二三（一七六三）年と明和三（一七六六）年の分は欠けている。

豊秋は宝暦八（一七五八）年五月から同一四（一七六四）年一月まで本宿組の名主を勤め、退役後も元名主として本宿組に重きをなした。

また彼は、宝暦一二（一七六二）年に三郎右衛門家に入夫して一〇代目当主となった忠敬（一七四五—一八一八）の後見をしたことでも知られる。

この日記のうち、両祭礼にかんする記述はほぼすべて『佐原山車祭調査報告書』の一四三—一五七頁に収録されており、これを利用する。

原題は巻ごとに異なるが、以後、本稿では「豊秋日記」と一括して表記する。

⑤製作年・正式名称ともに不詳で「御せんくうきういの覚」と仮題された記録。著者名も記されていないが、忠敬の息子で三郎右衛門家の一代目である景敬（一七六六—一八一三）の行動が直接形で記されているので、彼が著者と考えられる。記録中の最新の記事が文化七（一八一〇）年八月のものなので、このころ成立したものであろう。

天王社の歴史が詳述されている。

全文が『佐原山車祭調査報告書』の一六〇—一六八頁に収録されており、これを利用する。以後、本稿では「御遷宮」と表記する。

⑥「鎮守諏訪大明神由来二付所々旧記之写並代々申伝祭事取極其外有形書証」。新宿の有力者であった伊能権之丞家の八代目当主である景俊（一八〇六—？）が天保一〇（一八三九）年六月に作成した記録。

諏訪神社と諏訪祭礼にかんする歴史が詳述されているが、天王社と祇園祭礼にかんする記述も散見される。

全文が『佐原山車祭調査報告書』の一二—一九頁に収録されており、これを利用する。以後、本稿では「天保」と表記する。

⑦「鎮守諏訪大明神由来所々旧記祭事取極議定代々仕来申伝有形並対村方謂共証相之」。前記の景俊が嘉永三（一八五〇）年一〇月に作成した記録。内容は「天保」とだいたい同じであるが、これを補足するような記述もある。

全文が『佐原山車祭調査報告書』の一八九—一三〇頁に収録されており、これを利用する。以後、本稿では「嘉永」と表記する。

以上七点の引用にさいしては、①②は名称と頁数を示し、③④は名称と年月日を示し、⑤⑥⑦は頁が少ないので名称のみを示す。また、①④⑤の引用にさいしては、刊本の読点と並列点を適宜改変する。

① 佐原村の概要

中世には本宿あたりだけが佐原村と呼ばれており、中世を通じて香取神宮の社領の一部であった。それになし、新宿あたりは関戸村と呼ばれており、大戸荘の一部であった。大戸荘には千葉氏一族の国分氏が漸進的に勢力を伸張させた「山本一九八九」。

天正一八（一五九〇）年の徳川家康の関東入国に伴い、佐原村・関戸村を含んだ四万石の地域は家康の家臣鳥居元忠の所領となった。これを矢作領という。またこのころ、利根川を挟んで佐原村の対岸に広がる低湿地帯では、佐原村をはじめとする周辺の五村落による新田開発がなされた。これを新嶋領といい、このうち幕府領として明治初期まで続いた。

慶長四（一五九九）年六月におこなわれた矢作領の検地のさい、佐原村では「新宿」の「六郎右衛門」と「四郎左衛門」、および「本宿」の「内匠」と「弥左衛門」が「案内」を勤めたことが、伊能三郎右衛門家に伝わった「御検地水帳」に記されていた（『部冊帳 前巻』九）。本宿と新宿という名称がこのころに生じたことが窺える。また、このときの検地の石高一覧である「矢作領村附之事」には「一高千八百拾七石五斗枝村関戸有 佐原村」とある（『同書五』）。関戸村は佐原村の枝村とも認識されていたのである。中世の佐原村を「本」宿とし、それに関戸村を「新」宿として合わせる形で、近世の佐原村は成立したのである。

その後、慶長七（一六〇二）年の鳥居氏の転封に伴い佐原村は幕府領となり、さらに、慶長一三（一六〇八）年に旗本四氏の相給地として分割された。

近世初頭以来、佐原村には豪家を中心とした「組」と呼ばれる複数の社会的・地域的まとまりがあった。本宿には本宿組と浜宿組と新井宿組（仁井宿組）が、新宿には上宿組と下宿組があった。新井宿組を除く四組は慶長以前から存在しており、知行分割の単位とされたと考えられている。この四組は新嶋領内の開発にも従事し、延宝六（一六七八）年には、新嶋領内にあった佐原村新田の分割所有も四組によってその割合が定められた。新井宿組は四組に少し後れて成立したと考えられている（『酒井 一九八五。千葉県立房総のむら編 一九九二 五〇六』）。

組を率いた豪家としては、本宿組では伊能三郎右衛門家、浜宿組では永沢（長沢）治郎右衛門（次郎右衛門・二郎右衛門）家、上宿組では林

七右衛門家、下宿組では伊能茂左衛門家、新井宿組では奥主久左衛門家が挙げられる。このうち奥主久左衛門家についてははっきりしないが、ほかの各家の当主は享保期（一七一六―一七三五）ごろまでは原則的に各組の名主を世襲しており、以後もたびたび名主を勤めた。また、下宿組では伊能茂左衛門家の分家といわれる伊能権之丞家も有力で、下宿組や浜宿組の名主を勤めたこともあった。伊能氏と永沢氏は戦国末期の在地領主の系譜を引くというのが通説である。

各組の名主はその補佐役の数名の組頭とともに、村役人として村政に当たった。これは組役人とも呼ばれていた。本宿全体の問題は本宿三組の役人が、新宿全体の問題は新宿二組の役人が、佐原村全体の問題は五組の役人が管轄するという形であった。いうまでもなく、祇園祭礼は本宿三組の、諏訪祭礼は新宿二組の役人が管轄した。

要約すると、組とは、近世初頭に有力者を中心に佐原村を拠点として農業経営（周辺地域の新田開発など）に取り組んだ集団であり、かつ近世佐原村の運営（祭礼の執行も含む）を分担した組織ということになる。これはいうまでもなく、近世日本の各地でみられた、ムラあるいはマチと呼ばれる地域をいくつか内部区分する「村組」（各地で呼称は異なる）の機能（福田 一九九三 一〇六〇―一〇六二）とよく一致し、その典型例とみなせる。

佐原村の村組の特徴として重要なのは、村の経済的發展とそれに伴う人口増加が原因と考えられるが、組の内部が徐々に細分化されて複数の町が形成されていったという点である。

領主の変遷について簡単に述べる（川口 二〇〇一 六〇七）。

まず、慶長一三（一六〇八）年には本宿組三五〇石は天方氏、浜宿組五〇〇石は興津氏、新井宿組一一七石余は青山氏、上宿組三五〇石は近藤氏、下宿組五〇〇石は浜宿組と同じく興津氏の知行であった。

その後、新井宿組は寛永一〇（一六三三）年に幕府領となり、寛文元

(一六六二)年には佐倉藩領に替わり、さらに元禄一一(一六九八)年には上宿組の近藤氏の知行に加えられた。以後しばらく、佐原村は天方氏・興津氏・近藤氏の三給地となった。

しかし元文四(一七三九)年にいずれも召し上げとなり、元文五(一七四〇)年に一村すべて幕府領となった。これ以後の佐原村では知行分割はなく、安永六(一七七七)年には旗本津田氏の知行に、元治元(一八六四)年には佐倉藩領となり、明治四(一八七一)年の廃藩置県を迎えた。

佐原村は江戸時代を通じて利根川舟運の一拠点として物資の集散が盛んな地で、商業が発展して殷賑を極めた。その繁栄ぶりを、安政二(一八五五)年の自序のある『利根川図志』では次のように伝えている〔赤松一九三八 三二三〕。

佐原は下利根附第一繁昌の地なり。村の中程に川有て、新宿本宿の間に橋を架す(大橋と云ふ)。米穀諸荷物の揚げ、旅人の船、川口より此所まで、先をあらそひ兩岸の狭きをうらみ、誠に水陸往來の群集、昼夜止む時なし。

図1を使って説明する。大橋とは現在の忠敬橋のこと、ここを中心として銚子街道が東西に延びていた。東側が本宿、西側が新宿である。本宿側の銚子街道は八日市場から荒久に入るあたりで曲路となっており、かつては「荒久曲目」と呼ばれていた〔千葉県立房総のむら編一九九二八〕。忠敬橋から荒久曲目あたりまでを町通りまたは本宿通りともいう。これにたいし、浜宿を二分して南北に長く延びる通りを浜宿通りという。幅一〇メートル前後の狭い小野川の兩岸には多数の小さな河岸(舟着場)があり、物資の積み卸しに使われた。本川岸を中心として小野川沿いに南北に延びる通りを川岸通りという(対岸の新宿側にも同名

の通りがある)。

この景観とほとんど同じ景観が早くも元禄八(一六九五)年にはみられた。〔佐原村八町場二、本宿新宿申東西之町並二、中程二長拾間程横式間程之板橋御座候〕ということ、〔佐原市役所編一九六六 四五五〕、「村」といながらも事実上は町場であり、在郷町といえる状態であった。

また、すでに近世初期には新宿に六歳市が成立しており、これが佐原村の経済的発展の基盤となったが、その利を求めて、村では近世中期まで市の運営をめぐる争いが頻発している〔同書四四七―四五八。千葉県立房総のむら編一九九二 一六―一九〕。

町場に話を戻すと、享保元(一七一六)年の幕府の巡見使の通行にさいし、佐原村では一九の町に人足が割り当てられている。このうち本宿に属すると思われる町は八日市場・下仲町・寺宿・田宿・浜宿・本河岸・荒久・仁井宿・船戸の九町である〔佐原市役所編一九六六 一五四〕。この当時、すでに町が存在し機能していたことが確認できる。

「豊秋日記」を通読すると、宝暦・明和年間(一七五一―一七七二)の本宿には一一の町があったことが知られる。本宿組には八日市場・上中町(上仲町)・下中町(下仲町)・寺宿・田宿・橋本町の六町が、浜宿組には浜宿・川岸(河岸)・荒久の三町があった。ちなみに八日市場には前原という枝町が含まれており、寺宿は上下の二つに緩やかに分かれていた。そのため寺宿を両寺宿ともいう。おおむね天王社を境に、その南側に本宿組が、北側に浜宿組が展開していたことがわかる。

ほかに新井宿と舟戸(船戸。また舟津とも)があった。新井宿組はこの新井宿という一町だけで構成されていた。舟戸はその位置からみて浜宿組に属していたとも思われるが、詳細は不明である。以上、一一町である。

なお橋本町は、江戸後期に新宿の下宿組に同名の町(新橋本ともいう)ができたので、近代にはこれと区別して本橋本と呼ばれるようになった。

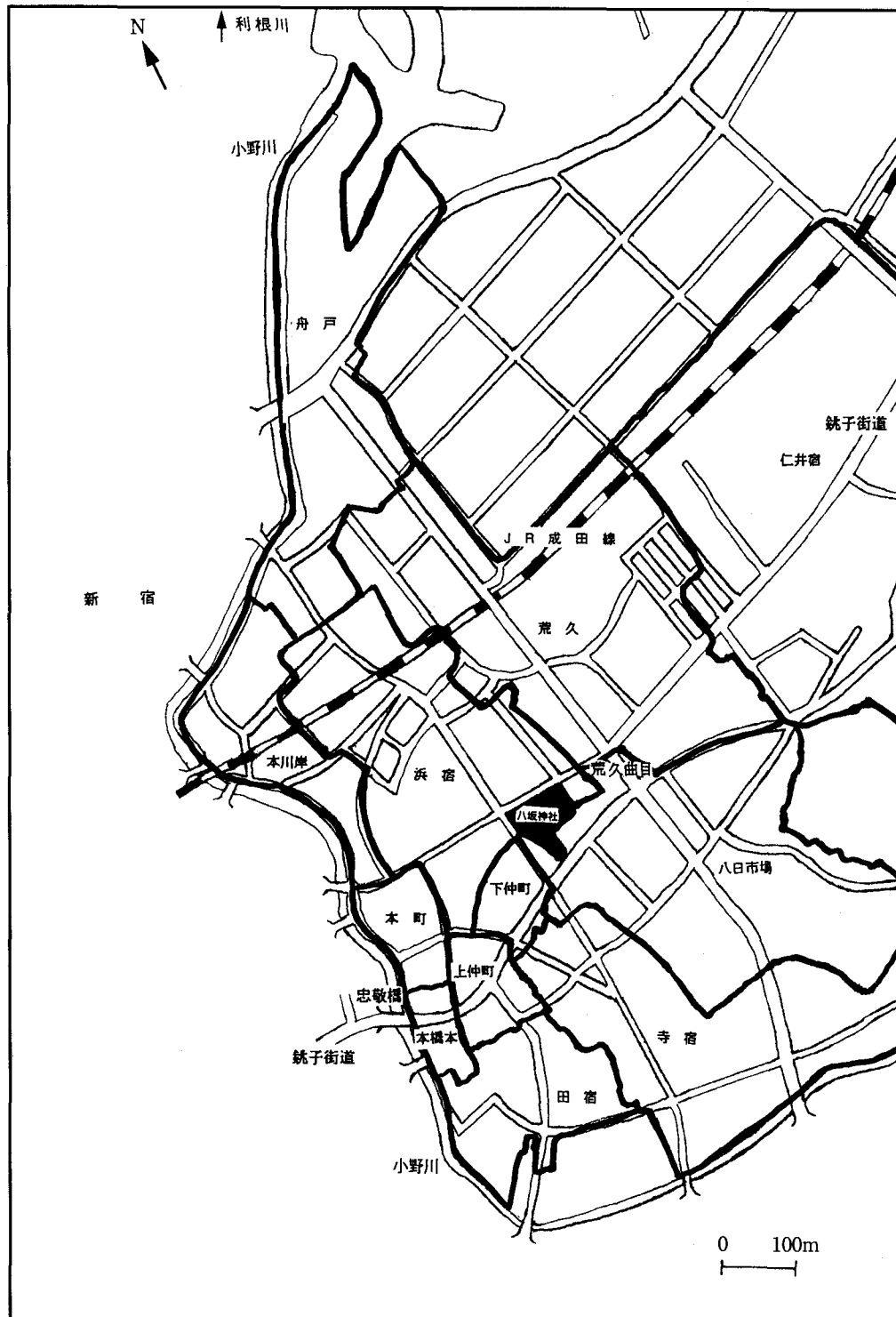


図1 現在の本宿主要部と町境

また川岸は本河岸に同じで、現在では本川岸と表記するのが普通である。そして川岸からは幕末ごろまでにその南側部分が上川岸^{かみがし}として分かれた。この町は新宿下宿組の同名の町と区別して本上川岸または本上河岸とも呼ばれ、現在では本町と呼ばれることが多い〔川口二〇〇一 一七〕。

佐原村の家数と人口がはじめてわかるのは元文五（一七四〇）年のことである。この年の「佐原村村鑑明細帳」によると、家数は九五八軒、人口は三八一九人（男性二〇五七人、女性一七六二人）で、さらに船五六艘、耕作船一〇艘とあり〔千葉縣史編纂審議会編 一九五八 一二二〕、関東でも有数の大村となっていた。

一方、「豊秋日記」明和五（一七六八）年巻の末尾に付された同年の佐原村の人別控からこの年の佐原村の家数と人口を計算すると、家数は一一九四軒、人口は四四三一人（男性二四〇二人、女性二〇二九人）となり、家数も人口も着実に増加していることがわかる。組別にみると以下のとおりになる。

本宿組	家数二〇二軒、人口 七四二人（男性四〇三人、女性三三九人）。
浜宿組	家数三三五軒、人口一三〇九人（男性七〇二人、女性六〇七人）。
新井宿組	家数 四六軒、人口 一八一人（男性 九三人、女性 八八人）。
上宿組	家数二二三軒、人口 七五五人（男性三九二人、女性三六三人）。
下宿組	家数三九九軒、人口一四四四人（男性八一二人、女性六三二人）。

② 祇園祭礼の成立

（一）江戸前期の天王社

天王社については、応安五（一三七二）年の文書に「神天王」とあるのが初見である〔千葉縣史編纂審議会編 一九五七 二一六〕。また、嘉慶二（一三八八）年の文書には「さ原八日市場牛頭天王」とある〔同書 二二三〕。近世の天王社は浜宿にあったが、その場所は八日市場に接する位置であった。中世の八日市場はその域内に近世の浜宿あたりも含んでいたのだろうか。いずれにせよ、近世の天王社の所在地は中世のころとはほとんど変化していなかったと思われる。

江戸時代に入るとまず、慶長一三（一六〇八）年六月二日付の「覚」の写しに天王社への言及がある。これは浜宿組と下宿組の領主の興津内記が「さ原」の「七郎右衛門殿」と「二郎右衛門殿」に宛てたもので、「平田」（比定地不明）の「田舎反歩」を「天王様へ」寄進するところである。

この「覚」は「御遷宮」に写されているものだが、景敬は「永澤次郎右衛門方ニ爾今所持之」と註記したうえで、「寛政七卯八月写之」したと続けている。宛人の一人である二郎右衛門は江戸初期の永沢家の治郎右衛門だったのだろうか。ともかく領主の寄進によって、近世天王社は本宿の総鎮守の地位を確認されたといえる。

くだって正保元（一六四四）年の話である。「部冊帳 前巻」二七頁の「乍恐指上ケ申返答書之事」という記事に、この年に本宿が奉行所宛てに準備した文書の写しが載せられている。この文書は、寛永二〇（一六四三）年一二月に端を発した本宿の市立での動きにたいし、すでに六斎市のあった新宿がこれを無効として起こした争論にかんする返答書である。

そのなかに「本宿^三先年市立申証^三ハ市神天王則本宿^三宮立、爾今六月十二日^三まつり仕候事^三」という文がある。今は本宿に市は存在しないがかつては存在し、その証拠に市神として牛頭天王の宮が本宿にあり、六月一二日には祭祀も行われている、したがって本宿にも再び市を立てさせてほしい、と主張している。八日市場という地名の存在からみて、本宿あたりに古くは市があったというのは確かだと思われるが、結局この願いは却下された。そして、ここに挙げられた祭祀というのがあとでみる祇園神事のことであろう。しかし当時の祭祀の内容はわからない。

次に天王社の消息がわかるのは三十九年後のことである。天王社には、「伊能権之允^{法名}」が同社の別当であつた清浄院^九の瞬阿法印に宛てた天和三（一六八三）年六月付の寄進状が現存している。このとき「伊能三郎右衛門^{法名}」を施主として天王社を造営するさい、それまでの境内地が狭かつたため、伊能市郎兵衛なる人物の所持する畑方一五間を権之丞が買い取つたうえで同社に寄進する旨が書かれている〔佐原市教育委員会編二〇〇一 一〇八に収録〕。

法名は後筆のようだが、「御遷宮」中の法名にかんする説明によれば、この権之丞は二代目久胤（一六四四～一七〇〇）、三郎右衛門は五代目景知（一六四六～一六九四）である。

新宿の有力者である権之丞久胤がわざわざ土地を買収してまで本宿の総鎮守に寄進をしているのは注目値する。これは、当時はまだ新宿の諏訪神社の格が高くなかつたため、天王社が村の第一の神社と考えられており、村の有力者としてはその造営にかかわる必要があつたからであろう。

「天保」と「嘉永」の両方に写されている別の寄進状によれば、久胤のたびたびの求めにおうじて興津氏が諏訪神社に寄進をおこなつたのは、ようやく元禄六（一六九三）年一二月のことである。天王社への寄進の例に倣つたものか、「中田巻反歩」を寄進している。この時点で諏訪神

社は領主から、新宿の総鎮守の地位を認められたとみなせる。新宿側でも天王社の占める地位が高かつた時代が長く続いたといえる。⁽¹⁰⁾

（二）二つの神事の統合による祇園祭礼の成立

江戸前期の本宿では今日みられるような形の祇園祭礼は存在せず、次のような過程を経て、元禄一六（一七〇三）年にこれは成立した。

本宿ではもともと、六月一〇日に浜下りの神事がおこなわれていた。浜下りとは、祭りの奉仕者あるいは神輿・神体が海浜や川辺に出て水を浴びて禊ぎをすることをいい、全国各地にさまざまな型がある。水の力で穢れを祓うものである。本宿ではこの神事を経て、一二日には祇園の神事がなされていた。これはいうまでもなく、祇園牛頭天王を祀る、悪疫退散の神事である。

両神事について、「景利日記」元禄一六（一七〇三）年六月一〇日条に次の記述がある。

一十日晴天、牛頭天王御浜下り之祭礼、私宅、組当番^二御神事衆手前へ寄合、別当清浄院、近年両組へ被願候ハ、今年より御輿御旅所へ出シ、十日より十二日迄御旅所ニ置候^而、諸人参詣為致度旨被申候ニ付、本宿中組頭百姓氏子之分、寄合相談之上、今年より御旅所へ三日之内御輿出シ置申度由、此方へも願出候、百姓氏子一同之願ニ有之上ハ別条無之候間、其通り被致候様ニと申渡候、依之、今年より相改り、六月十日ニ御輿御浜下二出、夫より十二日暮方迄大工治兵衛前へ御旅致、十二日暮時より彼所^二御祭礼御神楽有之、相済候^而御本社へ奉入候、但、先々八十日暮前ニ御輿出シ、橋本川舟^二御神酒献シ、神楽有之、御祭礼過御本社へ奉入、又十二日之暮前ニ御本社より御輿出シ、大工治兵衛前へ蒲^二御飯屋台拵、是^二御神事神酒奉献神楽有之、是より御本社へ奉入候事

まず但書きにある、従来の両神事の仕法からみていく。六月一日の暮れまえに天王社から神輿を出して橋本(町)まで運び、川舟(小野川に浮かべていたのである)に載せて神酒を奉獻する。このとき神楽奉納が伴う。これが浜下りの神事である。これが済むと神輿を天王社に運び帰る。一二日の暮れまえに再び天王社から神輿を出して大工治兵衛宅前に運ぶ。ここには御飯屋台が設けられており、そこで神輿にたいして神酒奉獻と神楽奉納がなされる。これが祇園の神事である。これが済むと神輿を天王社に運び帰る。

ところが近年になって清浄院が両組にこの仕法を変更するよう求めた。(四)で引用する史料にもあるが、新井宿組は両神事の運営にさしては本宿組の伊能三郎右衛門家の指揮下に置かれていたので、ここでの両組とは本宿組と浜宿組を指す。本宿中の組頭・百姓といった氏子たちはこの求めに賛同し、景利にこれを願い出、景利はこれに同意した。そこでこの年より、以下のように仕法を変えた。一〇日に橋本(町)で浜下り神事をおこなったあとに、神輿を天王社には戻さず治兵衛宅前に運び、そのまま一二日まで同所を御旅所として神輿を据え置く。一二日は暮れ時に御旅所で祇園神事をおこなう。それから天王社に神輿を戻す。

神事の終わることにすぐに神輿を天王社に戻すと参詣できる時間と人数は限られる。したがって、二つの神事の間二晩、御旅所へ神輿を据え置いて多くの人が神輿に参詣できるようにと清浄院は意図したのである。このころすでに町場となっていた佐原村は当然それなりの人口も抱えていたはずで、その点からすればこれは適切な変更といえる。

清浄院は浜下りと祇園という二つの神事を、その内容は変えずに間に御旅所への神輿の逗留を挟むことで一連の行事に統合した。御旅所に神輿が逗留することになった結果、一〇日の神輿の移動が行幸、一二日の神輿の移動が還幸という形になり、神幸が成立した。

以下、本稿ではこの一連の行事過程を一括して表現するさい、「祇園祭礼」という。厳密に言えばまだこの段階では練り物も出されておらず、祭礼と呼べるほど規模は大きくなかったが、議論を進めやすくするため、あえて祭礼と称する。

ところでこのときの神幸の範囲はごく狭かった。橋本(町)まで神輿を運んで川舟に載せて浜下り神事を執行したとあるが、ひとまず同町にある大橋のたもとあたりでこれを執行したとすると、そこは直線距離では天王社から三五〇メートルほどの位置になる。それから大工治兵衛宅前に設けられた御旅所に行く。かなりあとの記録だが、「豊秋日記」の明和六(一七六九)年六月八日条に御旅所は上中町にあると書かれている。上中町は橋本(町)に隣接し、天王社にも近い町である。「景利日記」の記述からみて、元禄のころの御旅所もこのあたりだったと思われる。直線距離では、大橋から上中町へはわずか一〇〇メートル弱で行き着き、同町から天王社へは二〇〇メートル弱で行き着く。

この記事にはまた、浜下りにかんして「私宅、組当番」であるという文がある。「景利日記」の以後の年の記事を見ると、浜下り神事と祇園神事にかんし、それぞれ一年交替で入れ違いに本宿組と浜宿組が当番を勤めていることが記されている。「私宅、組当番」は仕法変更とは無関係に記されていることから、両組が毎年交互に両当番を勤めるのは明らかに仕法変更以前からの慣例である。豪家の当主として、神職や別当に協力する形である程度の祭祀権を分有していたと判断できる。

本宿組では両当番とも常に伊能三郎右衛門家(橋本(町))にあった。伊能忠敬旧宅として現存¹⁾で神事がなされている。浜宿組では永沢治郎右衛門家(川岸にあった)で神事がなされるのが原則であったが、一時的に、おそらく貞享元(一六八四)年から正徳三(一七一三)年までは、同家の事情で他家でなされたこともあった。

実際の神事は一〇日は船上で、一二日は御旅所でなされたわけだが、

そのための御神事衆の寄合などは「私宅」でおこなわれた。当番を勤める家がいわば神事執行本部になっていたということである。

話を元禄一六（一七〇三）年に戻すと、「景利日記」六月一二日条には「今日、ぎおん、手前、客ニ伊能茂左衛門、小倉武右衛門、奥村小左衛門、宮崎長□呼、振廻致ス」とある。この日非番だった景利は伊能茂左衛門以下の新宿の者たちを招き、振廻舞（振廻）を供したのである。

なお、元禄一五（一七〇二）年の話だが、六月一日条に「此日限ニ芝居仕廻候也」とある。誰がどこで催したのかは不明だが、両神事の間の一日を使って芝居が掛けられたのである。翌年の祭礼成立をまに、すでに、たんに神事がなされるだけではなく、それに合わせて芝居もおこなわれていた。神事を取り巻く環境が賑やかになっていたらしい。清浄院による神事の仕法変更の求めには、一つにはこのような背景があったのではないだろうか。

（三）宝永・正徳年間の祇園祭礼

引き続き「景利日記」をみていく。

宝永元（一七〇四）年六月九日条に「今日限ニせつきやう芝居仕廻」とある。説経芝居とは説経節・説経浄瑠璃のこと、この年は祭礼の始まる前日にこれが演じられている。開催場所は書かれていない。翌一〇日条には「御浜下当番浜宿組ニ、御祭礼、吉左衛門所ニ勤ル」とある。宝永二（一七〇五）年六月一日条「持宝院ニ離子有之」、一二日条「浄国寺興行之せつきやう芝居、小倉常法分、寺宿角屋敷ニ立」。持宝院は現在に廃されているが新井宿にあったもので、浄国寺は現在も寺宿にある（佐原市役所編一九六六 九九三）。

宝永三（一七〇六）年六月一二日条には「今日より持宝院ニせつきやう芝居有之、今日、私宅、ぎおんノ当番ニ客呼、御祭礼勤」とある。

宝永四（一七〇七）年六月一〇日条には「手前組当番ニ候処ニ服有

之二付、組頭加兵衛所ニ御祭礼客振廻致ス」とある。服は忌服の意で、このため例外的に組頭の家が神事執行本部になったわけである。このあと景利は、祭礼成立の年を誤って元禄一五（一七〇二）年のことと記したうえで、さらに続けて御旅所の整備にかんして次のように記している。

去ル酉年（註。宝永二年）迄ハ生蒲ニ床仕候迄ニ覆・屋根等ハ無之処ニ、去戌年（註。宝永三年）、本宿中組之者共寄合板葺取置之、御飯屋寄進仕候、橋本組ニ幕一張致寄進、八日市場組よりのほり致寄進候、是より後段々祭礼道具出来仕候事

文中の「組」は現代ならばいずれも「町」と書くべきものであるが、宝永三（一七〇六）年の祭礼にさいして、中組（上下の別はまだなかったものか）からの寄進で板葺きの覆ないし屋根をもつ御飯屋が設けられ、さらに橋本組からは幕、八日市場組からは幟が寄進され、御旅所は整備されて立派になったという。

佐原村においては本来、本宿組・浜宿組・新井宿組といった広い地域を意味する「組」という語が、ここでは本宿組内のごく狭い地域を示すために使われている点に注意しよう。佐原村ではまだ「町」という語の使用が一般的ではなかったのか、あるいは「町」という単語にかなする景利自身の定義の問題だろうか。それはともかく、本宿組としてではなく、本宿組のなかの狭い地域の三つがそれぞれ寄進をおこない、景利はそれもまた「組」というまとまりとして表現している。これはようするに、狭い範囲での地縁関係にもとづいて共同で寄進に及んだということであり、そのまとまりを景利は小さな「組」と称したのである。このような狭い範囲の小組による祭礼にたいする共同行為が、こののち、町としての祭礼の参加につながることになる。

中組が御飯屋を寄進したのはやはり御旅所がこの組のなかに置かれて

いたからであろう。橋本組は浜下り神事のおこなわれ場所であり、八日市場組は天王社のすぐまゝに広がる組である。祇園祭礼や天王社に関係の深い小組が御旅所の整備にかかわったといえる。

ついで六月一二日条には「私宅へ新宿宮崎長□、和久屋与右衛門、遠城寺甚五郎客二呼、振廻」とある。ここでも景利は新宿の人間を客に招き、振る舞いを供している。

宝永五（一七〇八）年の「景利日記」は現存しない。続く宝永六（一七〇九）年の「景利日記」をみると、六月九日の夜、景利は本宿組の寄合を開いている。彼はまず、この前年より浜下り神事のさいに神輿を載せる「祭船」は浜宿組が出し、本宿組は囃子をすることになったと記している。この記述からも祭礼が徐々に賑々しくなっていた様子が窺える。しかしこの寄合で彼は、「万一大勢出候得ハ船へ当り喧嘩ニも罷成候儀有之候得、氣毒ニ候ゆへ、今年^者はやし候儀、無用之儀申渡」した。

ここでの囃子は単に演奏だけではなく、それに合わせて神輿を激しく揺り動かすことを意味している「小島二〇〇六」。神輿たいして囃子がなされるようになっていたことがわかるが、景利は浜下り神事のさいに人が祭船にぶつかって喧嘩になることを避けようとして、この年の神輿囃子を差し止めたのである。なお、このころ、祇園神事のさいにも神輿囃子がなされていたのかどうかは書かれていない。

明けて一〇日条には「御浜下御祭礼、此方組中当番ニ、私宅ニ御祭礼勤ル、番取祢宜遅ク参候故、暮時振廻致ス、昨日寄合ニ申渡候故、此方組よりはやし不^二出」とある。浜下り神事は前日の申し渡しのおりになされた。神事のあとには、神事を執行した神官も景利宅を訪れて振る舞いに与る慣例であったことがわかる。

宝永七（一七一〇）年六月一二日条、「今日より新井宿惠光院ニ歌舞妓芝居有之、今日、祇園御祭礼、私宅ニ勤」。惠光院は現在に廃されているが、新井宿ではなく八日市場にあった寺院なので「佐原市役所編一

九六六 九九三、景利は所在地名か寺院名を書き間違えたようである。

正徳元（一七一）年六月一二日条、「浜宿組、きおん当番也、今日よりさつま小太夫芝居、横宿七左衛門屋敷ニ立」。薩摩浄瑠璃が新宿下宿組に属する横宿という町で催されたという。祇園祭礼に合わせた芝居が新宿側の個人の屋敷でも催されたのである。

正徳二（一七二）年から同四（一七二四）年までの「景利日記」は現存しないが、この間の祇園祭礼については「部冊帳 前巻」四八三頁に「覚書」と題して触れられている。

その前半部では祭礼成立の年をさらに誤って元禄一四（一七〇一）年としたうえ、御旅所整備の年についても誤って元禄一五（一七〇二）年としている。それはともかく、重要なのは後半部にある次の記述である。

御こし之儀、正徳三巳年迄年々はやし候故、大破及候ゆへ、正徳四年午ノ夏、氏子寄合致修覆、はやし候儀相止、獅子・舟衣抔出し御祭礼相勤申候、はやし不申候故、ふきあへ無之ニ付、御こし出儀も前々ハ御社より辻へ出し橋本へ参候処ニ、当年より別当氏子相談之上、浜宿より荒久・新井宿迄参、新井宿よりまがめ・八日市場通り、橋本迄参候、御帰之節も八日市場より荒久・浜宿御通、御社へ御帰座被成候

正徳三、四（一七二三、四）年の祇園祭礼にかんする記述であるが、これは「部冊帳 前巻」の成立直前の話であり、さすがにこの部分では年次の誤りはないようである。この「覚書」の直後に「正徳四年午六月御こし修覆入用之覚」という詳しい支出明細が付されていることからみても、この年次は信頼できる。

神輿を囃しすぎたため正徳三（一七二三）年に神輿が大破し、正徳四（一七二四）年の祭礼前にこれを修覆した。これに伴いこの年は囃子を

出すのを取り止め、替わりに獅子や母衣^{はち}（舟衣）などが出されて神輿に供奉した。しかしどのような集団から（あるいは個人から）これらが出されたのかは書かれていない。

また、この年、はじめて神幸の範囲の拡大がなされた。元禄一六（一七〇三）年以降、神輿は天王社と御旅所を往復するようになっていたが、そのさい氏子圏を広く廻るようなことはなく、本宿組内のごく一部を通るだけだった。ところがこの年からは別当清浄院と氏子の相談の結果、氏子圏を広く廻ることになった。

その順路は以下のとおりである。一〇日の行幸では、天王社を出て浜宿・荒久・新井宿と進み、新井宿より反転して曲目（荒久曲目の略称）を経て八日市場を通り橋本町に至る。記述は略されているが、八日市場から橋本町に至るまでには下中町と上中町を通る。これも記述は略されているが、橋本町では浜下りがあり、それから上中町の御旅所に移るはずである。そして一二日の還幸では、八日市場から荒久に向かい、それから浜宿を通って天王社に帰る。

正徳五（一七一五）年六月一〇日条には、「御浜下御祭礼、当番浜宿組二、仁右衛門所二勤^{（12）}」とあり、永沢治郎右衛門家の当主が浜宿組の当番に復帰したことが確認できる。

宝永・正徳年間（一七〇四～一七一五）の祇園祭礼において重要なのは、小組すなわち町によって御旅所の整備がなされたことと、別当と氏子によって神幸範囲の最初の拡大がなされたことである。また、祭礼成立以前からなされていたものだが、各種の祇園芝居が引き続き盛んに催されていた。景利はといえば、神事の安全管理や客への振る舞いを滞りなくおこなっている。

（四）享保年間の祇園祭礼

続いて「景利日記」の享保年間（一七一六～一七三五）の記述をみて

いこう。

享保二（一七一七）年六月一〇日条には「延寿寺芝居、此日切二^{（13）}仕廻」とある。延寿寺は現在では廃されているが、上中町にあった寺院である〔佐原市役所編 一九六六 九九二〕。

六月一日条には「此日より庄厳寺二崎原立」とある。崎原は催馬楽の当て字であろう。よって芝居ではなく歌曲が演じられたことになる。庄厳寺（莊厳寺）は新宿諏訪神社の別当で、昭和二六（一九五二）年に諏訪台字天王台に移転（諏訪神社から徒歩五分ほどの所）するまで横宿にあった。同寺ではまた、翌年には芝居が掛けられている。

本宿と同様、新宿においても個人の屋敷だけではなしに寺院でも祇園囃子や祇園芝居がなされていたのである。祇園祭礼と直接の関係はなかった新宿においても、間接的ながら祇園祭礼にかかわる傾向があった。これとは逆に本宿が諏訪祭礼にかかわった事実は見出せない。このことは、長らく天王社が佐原村の第一の神社であったという歴史を反映している^{（13）}。

翌一二日、この日の当番であった景利は、清浄院の依頼により組頭源右衛門などとも相談のうえ、今年より「獅子打候者共客二呼^{（14）}」ぶに至った。この獅子は正徳四（一七一四）年の獅子と同じものと思われるが、複数形なのでおそらく三匹獅子であろう。獅子を出すのが継続されており、また継続される見込みであったことが窺える。一〇日のほうには獅子が出されたという記述はないが、たんに記述されなかっただけなのか、あるいは実際にも出されていなかったのか、という点はわからない。

享保三（一七一八）年六月一〇日条には、前述のとおり「莊厳寺芝居二付、今日、本宿中村遊も致ス、（中略）阿波太夫、今日芝居也」とある。この阿波浄瑠璃を観に、本宿からも多数の人間が訪れたという。

享保四（一七一九）年六月一二日条には「朝過よりぎおん御祭礼支度致ス、手前、当番也、枕五拾人前出ス、（中略）八つ過客衆脇出シ、暮

六ツ時御祭礼相済」とある。椀五拾人前とは随分な振る舞いである。景利は以前からいくらかの人間には振る舞いを供していたが、その規模は神幸範圍の拡大に合わせるかのように拡大していった。

享保五（一七二〇）年六月一〇日、「御浜下之当番二付、表二御祭礼之客呼、暮六ツ時、仕廻」。表で祭礼の客を呼んだということで、前年の記述と併せ考えると、広く一般の人間にも振る舞いを供していたようである。景利は一二日には「横宿觀照院へ開帳二参」った。断言はできないが、この開帳も祭礼期間に合わせたものではないだろうか。

次の二年間には特筆すべき情報はないが、さらに続く三年間には貴重な情報が多い。

享保八（一七二三）年六月八日の夕方、景利は実弟の「仁右衛門ヲ以權之丞方へ遣シ、牛頭天王御輿、去年はやし候大破二及候間、今年^者はやし不申様二両組寄合附、連判取寄致相談^{（手、脱力）}」させた。前年の日記に神輿大破の話はみえないが、これを踏まえた措置である。

本田本宿組前名主の景利と新田浜宿組名主の景寿だけで神輿囃子の件を決めず、本田浜宿組名主であつた智胤にも相談した。註（11）で述べたように、このころ永沢治郎右衛門家が本田浜宿組名主を世襲するという原則が崩れていたため、このような措置が採られたのである。また、本宿組だけでなく浜宿組も神輿囃子をおこなうようになっていたことが確認できる。

翌日の「朝、組頭中、太兵衛寄候^而、今夕寄合付、牛頭天王御輿はやし不申様二連判取候寄之相談致ス」。夕方の寄合そのものについて景利は記していないが、このとき景利と組頭中が組内の者たちから連判を取る予定であつたことは窺える。おそらく浜宿組でも同様だったのであるう。

一〇日は「御浜下之当番浜宿組二^而、仁右衛門所二^而御祭礼相勤ル」、一二日は「祇園当番、此方組新井宿也、表二^而祭礼料理出ス、組頭中并

組之者共参勤、七ツ時料理出ス、（中略）暮六ツ過二御輿御本社へ奉入、祭礼仕廻」。この年は本宿組ではなく新井宿組が景利を助け、振る舞いがなされた。この年の祭礼は滞りなく済んだようである。

享保九（一七二四）年六月一〇日条には「此方組、御浜下御祭礼当番二付、組頭中百姓共二寄合致候、支度、八ツ過、何^者罷寄、御神事料理出ス」とあり、さらに「氏子よりほろも亦名々ニ、子共とおもひく、拵出ス、八日市場より獅子出、浜宿より伊勢神楽出、にぎやかなり」とある。

母衣は町単位で出されたものではないらしいが、獅子と伊勢神楽は町から出されている。祇園祭礼において、町から練り物が出されたことが確認できるのはこれがはじめてである。獅子と母衣は正徳四（一七一四）年にも出され、獅子はさらに享保二（一七一七）年の還幸日にも出されていたが、出し元はいずれも不明だった。しかしその後数年のうちに、見込みと異なり獅子は出されなくなっていたらしい。この年の行幸日に至つて、景利がわずかこれだけの練り物にたいして出し元を記したうえで「にぎやかなり」と感想を述べているのは、母衣や獅子などの練り物が出されなくなっていたからだと考えられる。数年ぶりに練り物が再登場したのである。しかし練り物の具体的な動きは書かれていない。

一二日は断続的に雨が降つたが、無事に祭礼は終わった。なお、この日は練り物にかんする記述はない。

享保一〇（一七二五）年六月七日、「淨国寺二^而今日よりせつきやう芝居、建致ス」。そして景利は八日にこれを見物している。この芝居は一日に終わっている。

この年はまた、前年の練り物の登場の影響を受けたらしく、ほとんどの町から練り物が出されて賑々しく祭礼がなされた。付祭りの初めといえる。ただしこれは一時的な現象に終わってしまい、練り物の投入が常態化するのには、「豊秋日記」によれば明和五（一七六八）年からである。

話を享保一〇（一七二五）年に戻して、六月九日条に「祇園祭礼、おしまへ・踊、組中足揃有之」とある。明日から始まる祭礼に備えて、組の者たちが押前と踊りの稽古をしたという。この「組」が町の意であり、具体的には景利の居町の橋本町を指すことは翌日の条から知られる。その一〇日条に次のようにある。

今年^き祇園祭礼、橋本より向、寺宿角迄、おしまへ一組・小舟踊壱組、田宿よりおしまへ一組、おほりかしより屋台おとり一組、浜宿より伊勢神楽、前原近所、獅子一組、小舟踊・子共踊共二二組、まがめより棒つかへかさはり人形、にい宿よりねすの金箱ノかさり物、

この記述は明らかに神輿の通過町順に書かれている。神輿はまず天王社を出て、おそらく銚子街道を西進して下中町・上中町を経て橋本町に至った。記述がないところを見ると、下中町と上中町は練り物を出さなかったようである。ついで橋本町からその向こうの寺宿の角まで進んだという。しかしすぐあとで理由は述べるが、この寺宿は田宿の書き間違いと思われる。「おしまへ」は隊列を組んでの行進の意。「小舟踊」は舟にちなんだ踊りであろうが、不詳。橋本町はこの二つの練り物を出した。前日に稽古していた二つである。そのあと神輿は田宿に進み、同町は押前を一組出した。

それから神輿は反転して川岸通りを北上したと思われる、「おほりかし」に至った。「おほりかし」は「お堀川岸（河岸）」で、同日条の別の箇所今日の当番は「おほり仁右衛門所^二致ス」とあるように、用水路に囲まれていたため「お堀」と呼ばれていた永沢治郎右衛門家「小島一九七八七六」の周辺を指す。つまりここでは同家のあった川岸を指している。「おほり」は「於堀」や「小堀」と書かれることもある。川岸

は「屋台おとり」を出した。屋台を移動舞台に見立ててその上で踊りをなしたものであろう。諏訪祭礼も含めて、これが佐原における「屋台」の初見である。

ついで神輿は東進して浜宿に至った。同町は前年に続いて伊勢神楽を出した。それから浜宿通りを南下したものと思われる、前原あたりに至った。前原は八日市場の一部なので、前年同様、八日市場から獅子が出されたと判断できる。「獅子一組」ということで、三匹獅子であろう。さらに同町は小舟踊りと子供踊りも出した。子供踊りは文字通り子供の踊りであろう。

そのあと神輿は銚子街道を東進して曲目を経て荒久に至った。同町は棒をつがえて飾りを貼った人形を出した。さらに銚子街道を東進して新井宿に至り、同町はねずの木で作った金箱を出した。

新井宿からあとの行程は書かれていないが、もちろんそこから橋本町まで戻って浜下り神事がなされたのであろう。練り物がたくさん出されたほかは「例年之通、御輿、御旅有之」、最後には神輿を御旅所に「納候也」とある。

さて、神輿の巡行にさいして多くの練り物が出されたわけだが、これは長い間神輿に随行したものではない。神輿の通過町順に「A（の町）よりB（の練り物が出された）」という表現から、練り物は神輿が町に到着するのを迎え、その町内だけで神輿に随行し、神輿が次の町に入るのを見送ったことが知られる。この点は荒久の例がもっとも明瞭で、同町は八日市場との町境である曲目で神輿の到着を待ち構えていたことがわかる。さらに次の町では、その町の練り物も同様に動いた。

練り物を町単位で出したうえ、町にやって来る神輿の歓待も町ごとに、町境を超えずにおこなったのである。これは一面では、練り物の数が多かったのがそれが神輿の巡行に支障を来たさないうようなという措置であったと思われるが、結果的に町の存在とその領域が居住者に明示され

たことを意味している。村組と同じく町のことも「組」と称していた景利の表現はさておき、このときすでに町という集団がその居住者にとつては自明のものとなっていたことは間違いない。

以上を踏まえて再び「橋本より向、寺宿角迄、おしまへ一組・小舟踊壺組」という文をみてみよう。橋本町から寺宿に行くには上中町を通過しなければならぬので、この記述によれば橋本町の練り物が上中町も通ったことになる。それでは練り物が町境を超えることになり、不自然である。現在と異なり、この当時の橋本町と寺宿には境を接していた箇所があったという可能性もないではないが、ひとまず、この寺宿は田宿の書き間違いと解釈しておく。そうすると、この文に続く「田宿よりおしまへ一組」という文にもうまく繋がる。この年の行幸は、おそらく寺宿および舟戸は通過しなかったであろう。

ところでこの年の行幸路は、正徳四（一七一四）年に拡大された行幸路よりもさらに範囲が拡大している。しかしこれはこの年に多くの練り物を出すことにしたため採られた例外的な措置である。これはあくまでも例外的な措置であり、原則的には近代に至るまで行幸路は正徳四（一七一四）年の順路を踏襲していた。この点は④の（二）で確認する。

話を進める。一二日の還幸日にも、短いながら練り物の記述がある。

祇園御祭礼当番此方組^二、表^二致ス、（中略）今日昼過、おしまへ表へ入、夫より新宿権之丞所へ入、門より入、裏門へ出、川道より宿へ出、上宿迄参候也、（中略）御祭礼、暮六ツ時に仕廻、御興奉入候也、

昼過ぎに押前が景利宅に入り、それから小野川を越えて新宿の智胤宅に入り、川沿いの通りから宿（下宿組の意か）へ出て、上宿組まで行ったという。この押前の出し元は記されていないが、一〇日の練り物から

みて橋本町ではないだろうか。まず町内の景利宅に入り、それからこれも町内に架かっていた大橋を渡って新宿に入ったものと思われる。この押前は、本宿を還幸している神輿とは無関係に動いており、しかも新宿に出向いている。神輿の歓待は一〇日に済ませたので、一二日は余興として新宿にも出かけていったことであろう。

この年で「景利日記」は終わっている。景利が神事の運営にさいして本宿組および新井組の者を動員していることが確認できたわけだが、その運営には町という単位はいつさい関係していなかった。練り物にかんする記述には出し元の町名が出ているが、神事はあくまでも組という単位でおこなわれ、町という新しい単位はべつに必要ではなかった。しかし神幸（厳密にはそのうちの行幸）のほうでは、享保一〇（一七二五）年に町々がこれに練り物を付け出してその存在を明示した。これが享保年間の祇園祭礼において重要な点である。

また、神輿離子の活発化や当番時の伊能三郎右衛門家の振る舞いの拡大も見逃せない。祇園芝居など、祇園祭礼の期間に合わせた催物も引き続き盛んになされていた。全体に祭礼が大掛かりになっていく様子が看取れる。一つ付言しておく、当番復帰後の永沢治郎右衛門家の振る舞いについて景利は記録していないが、おそらく三郎右衛門家の振る舞いと同様のものではあったろう。

ここで目を転じると、「御遷宮」には一九世紀初頭の神事関係者（御神事衆）への振る舞いと両当番のあり方について記されている。ただし一般客向けの料理の有無については書かれていない。

振る舞いは一〇日の当番でも一二日の当番でも同じで、料理は次のとおりである。膾（白瓜・鱈）・汁（どじょう、根芋）・坪（あらめ、豆）・飯・香の物（白瓜）・平（からし、くづ、茄子、胡麻の味噌和えあるいは胡麻醬油）、および猪口が一六。そして

右振舞之儀、先規より別当・禰宜・太夫并村役人・興持呼候^{マツ}、本宿組・新井宿組^者伊能三郎右衛門、濱宿組^者長沢次郎右衛門兩人二^而、十日御濱当、十二日御祭礼当と申唱、入違隔年二致し来候事

と説明されている。

これを見ると、一九世紀初頭の振る舞いおよび両当番のあり方は一八世紀前期のものとさほど変わっておらず、神事も組単位で引き続き運営されていたことが知られる。

(五) 神輿行列の整備

前項で述べた、八日市場の獅子と浜宿の伊勢神楽についてはなお記しておくことがある。享保一〇(一七二五)年の行幸には多くの町が練り物を出したが、しかしその後ほとんどの町は練り物を出さず、これが常態化するの^は明和五(一七六八)年からである。

しかしながら獅子と伊勢神楽だけは享保一〇(一七二五)年以後も出され続け、たんなる付祭りの練り物ではなく、神輿行列の構成物となっていた。一次史料にあまり恵まれていない事柄だが、この項ではその過程を中心に議論していく。

はじめに指摘しておくべきは現在の話である。現在は浜下りを祭礼衆日にやっており、そのあと神輿行列が本宿全町を巡行している。つまり行幸と還幸の区別がなくなっており、準備的なものを除く神輿の全ての行事は衆日にまとめてなされている。

重要なのは、このとき屋台(山車)とはべつに、八日市場からは獅子頭を被った三人の男児(普通、獅子と呼ばれる)が出されてときおり舞を舞いつつ神輿の先払いを勤め、浜宿からは伊勢神楽で用いる一個の獅子頭(普通、神楽と呼ばれる)がかなり小さな屋台に載せて出されて神輿の後押さえを勤めている、という事実である。神楽のほうには現在も

一〇人前後の囃子方が付いているので、こちらも古くは人が被って伊勢神楽の獅子舞を舞っていたものと思われる。

さて、「豊秋日記」宝暦一四(一七六四)年六月一二日条に、川岸の者たちが村役人中にたいして「天王様之儀(中略)、首尾能川岸通も相廻候様願」い出たとある。享保一〇(一七二五)年の行幸のさいに神輿が川岸を廻ったこともあったが、これは変則的な例で、その後は行幸はもちろん還幸のさいにも神輿が川岸を廻っていなかったことが窺える。それで神輿を川岸通りにも廻してくれるようにと願い出た。

これにたいする役人たちの反応は「尤只今迄ヲソシハヤシ相廻り申候得共、格別願申二付」きこれを認める、というものであった。もちろん今までもヲソシハヤシは川岸通りを廻っていたが、どうしてもというので今年には神輿も川岸通りに廻すことにする、という回答である。

佐原市の郷土史家の香取五郎氏によれば、ヲソシハヤシとは浜宿の神楽の別称であるという「香取一九八七 二〇」。浜宿の神楽がなぜ神輿から離れて他町の川岸を廻っていたのかというと、神輿の通らない場所を神輿の代わりに廻るといふ役割があったからだと解釈できる。今日でも浜宿の神楽は神輿から一時的に離れて神輿の通らない道路を進むことがある。やはり神輿の代わりを勤めているのである。「ヲソシ」は「囃子—早し」にかけて、神輿より後れて進むの意であろうか。それはともかく、この条から、このときすでに神楽が神輿の後押さえとなっていたことと、ときにはその代役も務めていたことが推測される。

では先払いはどうだったか。「豊秋日記」明和五(一七六八)年六月一二日条に、この日の還幸中に豊秋が川岸の者たちに語った「是迄数十年八ヶ市場しし先払^二御祭礼勤来申候」という言葉が記されている。八日市場の獅子は先払いとしてこれまで数十年、神輿行列を構成していたというのである。

明和六(一七六九)年五月晦日条には、同日、八日市場が三組役人宛

てに出した口上書の写しが載っている。そのなかに、そもそも八日市場による獅子の差し出しは村役人の指示であったという文がある。

八ヶ市場之儀^者御存之通、先年より村方御役人様被仰付、御神輿先払之獅子差出役掛り^而相勤来候^而、困窮町ニ御座候得共相応入用相かけ、凶年たりとも御神輿御出之節、露払之役是迄勤来申候、

以上を要約すると、次のようになる。八日市場も浜宿も、数こそ違うが獅子頭という同じ種類の練り物を享保九（一七二四）年という同じ年から行幸に出し始めた。しかもこの年、町として練り物を出したのはこの二町だけだった。そして多くの町が練り物を出した翌年の行幸にも、両町は獅子頭を出した。その後、他町が練り物を出さなくなっても両町は獅子頭を出し続けた。これは偶然の一致ではあるまい。

そこで、それまで数年間中断されていた獅子を出すようにという指示が享保九（一七二四）年に村役人から両町に出されたと考える次第である。

なぜこの両町が出し元選ばれたのかは不明だが、本宿組から一町が、浜宿組から一町が選ばれたとは考えられる。神輿行列に町という単位が関係するようになったという点で、そしてそれが村役人からの指示であつたらしいという点で、これは重要である。村役人は町を積極的に祭礼に動員したことになる。

しかし当初は神輿行列の構成物という役割はまだ曖昧だったと思われる。享保九（一七二四）年の行幸における両町の獅子頭の具体的な動きは不明だが、翌年の行幸では、他町の練り物と同じく両町の獅子頭も神輿に供奉せず自町で神輿の到来を待ち受けていたからである。つまりこの年の行幸では両町の獅子頭も付祭りの練り物の一つにすぎなかったといえる。なお、この両年とも還幸日に両町の獅子頭がどうしていたかは

不明である。

その後も両町は村役人の指示を重んじたらしく、獅子頭を出し続けた。やがて、年次は特定できないが、先払いは八日市場の獅子が、後押さえは浜宿の神樂が勤める形が定着し、明確に神輿行列の構成物となった。

結論としては、村役人の指示で享保九（一七二四）年の少なくとも行幸日には八日市場と浜宿からそれぞれ獅子頭が神輿行列に出され、両者は享保一〇（一七二五）年からあとのまもないころに神輿行列の構成物として固定され、その状態が明和五（一七六八）年まで「数十年」続いていた、ということである。

本項の記述としてはこの結論だけで充分である。しかし、ことのついでに神輿行列についてさらに話を続けてみたい。

まず解決すべきは、宝暦・明和年間（一七五一～一七七二）の還幸には獅子と神樂が供奉していたわけだが、同じ時期の行幸にはこれらは供奉していたのだろうか、という疑問である。

「豊秋日記」には、還幸に獅子や神樂が出されていたことが年によっては言及されているが、行幸の獅子と神樂についてはまったく言及がない。出されてはいたがたまたま言及されなかっただけとも考えられるが、しかしこれはやはり実際にも出されていなかったのではないだろうか。

明和七（一七七〇）年六月一〇日条に、二日後に迫った還幸の予定として「当年ハしし出し不申候」と記されているが、一〇日の行幸の獅子の出欠については記されていない。還幸に獅子を出さないのは異例の事態だったので豊秋はその旨を記したわけだが、行幸の獅子についてはこの年も何も記していないのである。

ここで、還幸と同じく行幸にも獅子を出す慣例があったと仮定してみよう。その場合、次の二つに話は展開する。⑦この年も例年どおりに行幸に獅子を出したとすると、還幸のほうだけに獅子を出さないという予定は不自然である。⑧この年は例年と異なり行幸にも獅子を出さなかつ

たとすると、その当日の日記にその事実を記していないのは不自然である。したがって、論理的にみればという話だが、この仮定は誤っていると考えられる。

そうすると先払いが出ていないのに後押さえだけが出ていたとは考えがたいので、浜宿の神楽も出ていなかったと推測される。

しかしこの推測が正しかったとすると、これはほどなく変更されたといえる。「御遷宮」に、「両日共二天王宮行列」と前置きしたうえで、一九世紀初頭ごろの神輿行列の構成が先頭から順に書かれているからである。つまりこのころには行幸と還幸で構成に違いはなくなっていた。宝暦・明和年間には還幸だけに随行していたと思われる獅子と神楽が、やがて行幸にも随行するように改められたのである。では、その構成をわかりやすく示しておこう。

掛竿——本宿からは三郎右衛門と治郎右衛門が、新宿からは茂左

衛門と権之丞が、二本ずつ出す。享保末年に三郎右衛門がこれを幟に変更し、残りの者も追々これに倣う。

獅子——八日市場より出す。

猿田彦——新井宿より出す。

御神輿——前々は三郎右衛門方へ神輿を入れたうえで、同家では座敷で神酒を奉献した。(註。元文五(一七四〇)年に佐原村が)幕府領になってからは治郎右衛門方にも神輿を入れたこともあったが、ほどなく両家ともこれを止めた。

神楽——浜宿より出す。

幟というのは、註(10)で述べた幟と同じ物を指している。獅子と神楽は前述のとおりである。

猿田彦は天狗とも称され、現在も引き続き新井宿から出され、獅子の

後方に位置し、獅子とともに神輿の先払いを勤めている。管見のかぎり、「景利日記」や「豊秋日記」をはじめ一八世紀の史料には猿田彦についての言及はなく、「御遷宮」に至ってようやく初出する。猿田彦が獅子や神楽に後れて登場し、神輿行列に加わったのは間違いないさうである。登場の理由は不明だが、新井宿組が本宿組とはべつに、神輿に供奉させる自前の練り物を欲するようになったということだろうか。つまり新井宿組は両神事の運営においては本宿組と同じく伊能三郎右衛門家の指揮下に置かれていたが、神輿行列には独立した練り物を供奉させたいと考えたということだろうか。なお、猿田彦は近世都市祭礼の先払いにはよく登場するもので、これが練り物に選ばれたのであろう。⁽¹⁵⁾

ところで右の神輿行列の構成の記述には、次のとおり但書きが付されている。これによると、かつては獅子と神楽が三郎右衛門家・治郎右衛門家・権之丞家に入る慣例があったという。

但、右獅子・神楽入候節^者、前々^者三郎右衛門より初、仁右衛門・権之丞と入来候所、享保之中頃勘解由隠居之砌、仁右衛門方へ先キへ入候事有之(中略)、夫より両家相午二当番先と相定候事

仁右衛門というのはもちろん治郎右衛門家の景寿(一六七六―一七四八)のことで、権之丞は時期的にみて智胤(？―一七四九)のことである。勘解由というのは景利のことで、彼は正徳四(一七一四)年に通称を三郎右衛門から勘解由に改めている。景利が隠居したのは享保四(一七一九)年のことであり、享保の中頃というよりむしろ初年である。景利は享保一一(一七二六)年六月二十七日に死去しているので、享保の中頃にこだわれば、「勘解由逝去之砌」のほうが適切かと思われる。「この段の景利にかんする記述は、おもに酒井 一九九七 五五による」。

繰り返しになるが、景利は享保二(一七一七)年六月一二日に出し元

の不明な獅子をはじめて客に呼んでおり、これは継続される見込みであった。しかしそのあと獅子は一時的に出されなくなり、享保九（一七二四）年に至って八日市場と浜宿がそれぞれ改めて獅子頭を出すようになった。

但書きを信頼すれば、享保九（一七二四）年以降も三郎右衛門家では、獅子頭を客として呼び入れるという規式が存在したことになる。また三郎右衛門家を訪問したあとには治郎右衛門家と権之丞家にも獅子頭は入っていき、それがもともとの規式であったという。⁽¹⁶⁾しかし享保の中頃、景寿宅にさきに獅子頭が入ったことがあり、それを機に順番が改められたという。

ところで、享保一〇（一七二五）年の還幸日におそらくは橋本町の押前が景利宅に入り、そのあと智胤宅にも入ったという事実は、右でみた獅子頭の動きを真似たものかとも思われる。また、猿田彦が右の三家に入ったという記述がないのは、やはりこれが獅子頭より後れて登場したものである。

③ 祇園祭礼の展開

（一） 還幸路の拡大と還幸の混乱

宝暦・明和年間（一七五一～一七七二）の祇園祭礼の様相については「豊秋日記」によって詳しく知られる。そこには、還幸とそれについて付祭りが発展していく過程が記されている。以下、③ではもっぱらこの史料に沿ってその様相をみていこう。

宝暦六（一七五六）年六月一二日条には「天王はやし之儀、七ツ半時よりみこし大破し、五ツ半時御入」とある。またもや囃しすぎたせいで神輿が大破し、そのうち天王社に納められた。

宝暦一二（一七六二）年六月一二日条には「天王様御祭礼八ツ時よりおたひよりはやし申候」とある。

右の両条に簡潔にみられるように、「豊秋日記」では六月一二日条に神輿囃子がなされたという記述が頻出するが、六月一〇日条にこれがなされたという記述は皆無である。これは、宝暦・明和年間には還幸のほが重視されていた一例である。

宝暦一四（一七六四）年四月二七日条には、八日市場の若者三人が豊秋を訪れ、祇園祭礼に合わせて狂言を催したいが町内で話がまとまらなと述べた。豊秋はこれに賛成したうえで、町内行事へも願い出て相談するように助言した。結局、祭礼狂言は六月九日から一三日まで催された（一一日は休演）。六月一〇日条には、狂言は町々に入れて演ずるのではなく、町々に断つたうえで吉祥院（比定地不明）に常舞台を作って演ずるとある。また一〇日には、天王社で子供踊りが奉納されたともある。

なお「豊秋日記」には、祇園芝居の開催にかんする言及がここにしかない。景利の時代に比べ祇園芝居は衰えていたようである。

同年六月一二日には還幸路の拡大が議せられた。その様子から、村役人だけでなく町々の行事も祭礼にかかわっていたことが確認できる。

「村役人中より町々行事申聞」かせた指示が以下のように記されている。これまでヲソシハヤシは川岸通りも廻っていたが、神輿はそうではなかった。神輿も川岸通りに廻してくれるようにという願い出が川岸より村役人になされた。これを聞き届けることにしたので、町々の行事と若者たちは御旅所から御旅所まで神輿の警護（「ヲタヒヨリヲタヒマテケイコ」とある）に付き、囃子はそのあとでするように、という指示であった。

少しあとでまた述べるが、このころの還幸路は御旅所を出たあとしばらくしてまた御旅所に戻り、それから天王社に還るといったものであった。

そして神輿にたいする囃子は御旅所に戻ってからするものであった。

この年は、還幸路の拡大によって囃子の開始が混乱しないようにということで、村役人は御旅所から御旅所までの間の神輿の警護に各町行事と若者たちを付けることにしたのである。

かくして還幸が始まったわけだが、神輿が川岸通りを廻ったのでまもなく御旅所へ来るものと思つて御旅所で囃子を始めたところ、神輿は御旅所へは来ずに上寺宿に入り、下寺宿へ進み、八日市場へ至ったところで動かなくなつてしまった。そこで豊秋は仲裁し、神輿を新井宿に遣わした。これは、先だつてより新井宿では疫病が流行つていたからである。と豊秋は説明している。祇園祭礼は悪疫退散を旨とするものであるため、八日市場まで行つたついでに新井宿まで行かせたということらしい。

結果的に、正徳四（一七一四）年に改定された還幸路には含まれていない寺宿と新井宿にも神輿が廻つたのである。しかし神輿が御旅所へ行かずに予定外の動きを取つた理由はここには書かれていない。

翌明和二（一七六五）年六月一二日条には、その理由が二つに分けて書かれている。まず、最初の話を紹介する。

先年十二日御祭礼の節はやし申候儀ハ、古人共申伝有之候、御旅より御立、八ヶ市場曲目迄、上ハ大橋本迄、此間ニ^ニはやし申候由、勿論みこしそんじ申事無之候由、近年ハ左様ニ^ニハ無之みこしそんじ申候故、去申年川岸之者共三組御役人^江願出、川岸^江みこしそんじ申候様ニて相廻度旨^ニ行事共願出候、依之町々行事^江申付、川岸も相廻シ御旅よりはやし申候けいこ申付候、

これを整理すると次のようになる。慣例により、神輿囃子は神輿が御旅所に戻つてから、八日市場曲目（荒久曲目に同じ）と大橋のたもとを両端として、すなわち本宿通りでおこなうことになっている。しかし近

年、これを守らずに御旅所に戻るまえから囃子がなされるようになり、神輿が損傷することも多くなった。そこで昨年、川岸の行事たちが神輿を川岸にも廻すように三組役人に願ひ出たさい、神輿を無傷で川岸まで廻してほしいと伝えた。これを受けて三組役人は、川岸へも神輿を廻し、そして途中で囃子が始まらないように警護するよう町々の行事に申し付けた。

次の話を紹介する。この日の九ツ時、祇園神事の当番であつた伊能三郎右衛門すなわち忠敬の家で振る舞いがあり、豊秋も出席していた。その席で清浄院の発言があつた。

当年 天王はやし可申様子相聞^江申候、勿論若イ者共途中よりはやし申候風聞有之候、左様ニ相成みこしそんじ申候上ニて、川岸通相廻シ申候^而、又々川岸之者共とやかく可申旨六ヶ敷候得^者、去年通町々行事共呼けいこ為致、川岸ヲモ首尾能相廻シ、天王御旅所迄御共仕、夫より如何様共仕候致度旨、清浄院申二付、三組相談之上、去年通町々行事共清浄院^江呼出シ申付候所、（後略）

直接的な説明ではないが、この話から前年の奇妙な還幸のおおよその理由は窺える。警護が付いたにもかかわらず、そして久しぶりに自町に來た神輿であつたにもかかわらず、前年、川岸に着いたときには神輿は損傷していた。そこで川岸の者共は立腹して不満を述べた。不満を述べただけではなく、彼らは川岸から隣町の上中町にあつた御旅所に神輿を運ばず、腹いせに寺宿まで予定外の巡行をしたうえ神輿を止めてしまった。そのあとどう納得したのか不明だが、彼らは豊秋の仲裁を容れて神輿を新井宿に廻した。このためこの年は正式な囃子はなされなかつたやうである。

さて、清浄院は前年のような騒擾が再発するのを恐れていた。そこで

清浄院は再び町々の行事を神輿の警護に付け、今度こそ、川岸も滞りなく廻して御旅所まで戻って来るように、そのあとは好きなように囃子をするように、と出席者に申し渡した。これを受けて三組役人は前年のように町々の行事を招集し、警護への参加を申し付けた。

ところが、後略箇所を要約すると、川岸の行事たちはこの要請を拒否し、そのため川岸の属する浜宿組の組頭である治兵衛は立腹し、かつ説得に当たった。そこでようやく行事たちはこの要請を承諾した。

それから八時半時に還幸が始まった。ところが神輿行列が川岸通りを廻っていたとき、「川岸之者共大勢罷出、みこし^五取付」いたあげく、これを止めようとした者たちに暴行を加えた。他町の若者たちは「例年之通御旅所よりはやし申事と」思い御旅所で待ち構えていた。「御役人方より右之段申付、行事けいご仕候故参申事」を信じて待っていたわけだが、川岸の者たちは神輿を放置したまま引き返した。神輿もことのほか破損した。これにより囃すことができなくなり、他町の若者たちも帰っていった。

この事件の処理をめぐるすぐさま組役人などがいろいろと相談したが、結局うやむやになってしまった。こうして長い一日が終わった。

川岸の住民たちの前年の遺恨はよほど深かったらしい。そもそも同町の行事たちも神輿の警護に熱心ではなかった。その結果、このような大事になってしまった。清浄院と組役人の要請にたいして、町の行事と一般の住民が反抗した事件といえる。

きわめて残念なことに翌年の「豊秋日記」は現存していないので、この事件が翌年の祭礼に何か影響を及ぼしたのかどうかはわからない。

ついで明和四（一七六七）年、まず六月九日に「当年^者明十日御浜下之つゝめでに本宿町々不残相廻可申旨、三組御役人中御相談之上」決まった。そしてこれは「新規之儀」であると説明されている。しかし実際に一〇日になると、川岸の者たちが浜宿組役人中に神輿を「先年之通十二

日町々御廻シ被下候様願出」だが、三組役人中は取り合わなかった。

そこで川岸の者たちは当年の浜下り当番永沢治郎右衛門にこれを願い出た。治郎右衛門はこれを容れ、浜宿組名主の三右衛門にたいして先年のとおりにするよう申し聞かせた。その結果、これまでどおり一〇日は神輿を町々に廻さず浜下りだけが実施され、一二日の還幸で神輿は「浜宿、河岸其外町々不残相廻」った。このときの還幸ではじめて、神輿が本宿全町を廻ったのである。しかしその途中、浜宿の者が早めに神輿を自町へ引き入れようとしたらしく、騒擾を起こした。

還幸時の全町巡行の初実施も重要だが、三組役人が神幸の規式の改変を決定したのにたいし、川岸がその決定に従わず、有力者の治郎右衛門を通じてその決定を覆した点に注意しておこう。神幸にかんして町がその主張を強めていく傾向が見て取れる。このときは治郎右衛門の支持を得られたので、川岸の主張が通った。

（二）還幸の全町廻りの確立と付祭りの復活

明和五（一七六八）年六月一〇日夜、上寺宿行事が八日市場行事に相談にきた。村役人中から町々行事への指示に従えば、今年の還幸は例年どおりで、田宿と両寺宿は廻らずに御旅所に戻り、そのあと囃子が始まることになる。しかしそれでは囃子勝負に身が入らない、なんとかならないだろうか、という相談である。

村役人中が前年の還幸のさいの全町廻りを一年限りのものとみなし、これを常態化する意志のなかったことが窺える。一方、四年前の川岸の要請もそうだったが、神輿が自町を通るか否かは町にとって重大事だったことが知られる。また、町対抗で囃子の良し悪しを競っていたことも知られる。そこで神輿を町内に廻したうえで囃子勝負に臨みたいという話である。

この相談を受けて翌一日、八日市場は寄合を開き、本宿全町に神輿

を廻せば混乱なく祭礼を奉納できるだろうということになり、そののち吉祥院での寄合で全町の行事の同意が得られた。そこで行事たちは浜宿組名主三右衛門方へ出かけていき（このとき、同家では三組の役人たちが寄合を開いていた）、右の件を願ひ出た。役人中および清浄院もこれに同意した。町々の行事たちの協力で還幸路にかなする合意が得られ、村役人がこれを追認したのである。すなわち還幸路にかなする村役人の最初の決定は覆った。このあと、還幸路は次のように決定した。

御旅御立被成

浜宿通^二而小堀宿^江下河岸・小堀河岸・田宿、夫より町通^二而上寺宿・下寺宿^江罷通、前原^江御廻り、夫より浜宿^江御出、舟戸、夫より荒久通り^二而遠新井宿下田迄、夫より御廻り被成候^而御旅所^江御入仕度旨^二而相定申候

小堀宿と小堀河岸は永沢治郎右衛門家周辺を指すので、川岸の町内の一区域であろう。下河岸は川岸の北側部分を広く指す¹⁷。下田は新井宿内の一区域と思われる。

また、「はやし之儀^者先年之通御旅より御本社迄、余町へ^者決^而御入申間敷候^二ということも確認された。囃子勝負は例年どおり御旅所に戻つてから天王社に還るまでの間におこなう。すなわち本宿通りでおこない、この道を逸れて他町へ神輿を入れることのないようにという意味である。一二日は前日の決定どおりに還幸がなされた。還幸の全町廻りが正式に決まったことを受けて、「しし計^二而も相成申間敷二付^一」き、八日市場では従来の獅子に加えて鷹狩りの仮装行列を急いで仕立て、御旅所に罷り出た。そして神輿巡行が始まり「相定之通小堀宿より下河岸^江罷越候処、河岸^二而千本はた仕候処、延寿寺河岸新右衛門前^二而て壹番二可相成旨^一」を、川岸の者が豊秋に申し出た。

神輿行列は浜宿から川岸の北側に入り田宿に向かって川岸通りを南下していった。延寿寺は上中町にあった寺院なので、延寿寺河岸とはすぐにこの寺に行き着ける場所にあった舟着場であろう。よって図1からみて、この舟着場は川岸（厳密には本町あたり）と橋本町（本橋本）の境界あたりに位置していたものであろう。

還幸のさいは全町を廻るという決定を受けて川岸では千本旗の練り物を用意しており、神輿行列が自町に到着するのを待つてこれに随行し、神輿行列が橋本町へ出ていくあたりでその先頭を替わってくれるように八日市場に頼んだ。川岸は自町内で神輿行列を賑やかしただけでなく、そのあとは神輿行列の先払いとして他町の領域も巡行しようと望んでいたのである。

これにたいして豊秋は「是迄数十年八ヶ市場しし先払^二而御祭礼勤来申候処、当年二限式番相成申事難相成候^一」といって拒否し、獅子と鷹狩り行列から成る八日市場は先頭を維持した。従来の神輿行列に加えて新たに練り物が登場したため、その扱いをめぐって神輿行列の構成に混乱が生じたのである。

豊秋は、練り物の登場を受けて次のように書いている。

右之通^二而年々かさりものも出、新ン宿様二罷成候^而、困窮人迷惑仕候間、来年^者随分かるく仕候様、御相談之上、町々行事^江急度御申付候様、村役人中^江申談候

新宿の諏訪祭礼のように、祇園祭礼でも毎年派手な飾り物を出すようになれば大変だと憂慮している。すでにみたとおり享保一〇（一七二五）年の祇園祭礼では町ごとに多くの練り物が出されたが、これはそののち常態化していなかったことがわかる。しかしここに至り、還幸時の神輿行列の先頭を勤めることを目的として練り物の投入が再び活発になった。

付祭りが復活したのである。

そこで豊秋は村役人中にたいし、村役人中で相談したうえで、町々行事へ来年の練り物は軽くする旨を申し付けるよう、申し入れた。

(三) 付祭りの混乱

明和六（一七六九）年五月一六日、三組役人の名で各町行事に廻状が出された。「当年[※]町々夥敷かさりもの等仕候様相聞^江申候」、しかし「大騒成かさりもの出来候共、御祭礼之場所^江差出不申候、此段相心得可申候」という通知だった。簡単な記述だが、このあとの騒擾も参照すると次のような背景がこの記述から読み取れる。

前年の還幸のさい、享保一〇（一七二五）年の行幸のときと同様、川岸は自町で神輿行列の到着を待った。そして次の町との境界あたりで先頭の交替を八日市場に申し出、拒否された。諸町はこの顛末を知っていた。そこで、本年になっていくつかの町では自町で神輿行列の到着を待つのではなく、御旅所に神輿を迎えにいつて還幸の最初の段階から神輿行列の先頭に立とうと考えたらしい。還幸の途中からその先頭に立って他町を廻ることは難しいと判断したのである。したがって「御祭礼之場所」とは天王社のことではなく、御旅所のことである。三組役人は混乱を避けるために御旅所に練り物を近づけないようにと通知したのである。五月晦日、「牛頭天王御祭礼二付、町々よりだし出申候故、番次之儀」について、八日市場から三組役人宛てに口上書が出された。だし（練り物の一種）を作る以上、町々がそれを御旅所に近づけないで済ませるという保証はどこにもないわけで、むしろ神輿行列の先導のためにその番次（順番、並び順）を確定したほうが現実的だと、八日市場は考えたのである。しかし実際に八日市場にとって重要だったのは、もちろん自町が一番を維持することであった。口上書に次のようにある。

「当祇園御祭礼為賑之為、氏子町々二^而少々ッ、だし等差出」す動きが

あるが、八日市場でも儉約に努めてだしを奉納しようと考えている。八日市場は村役人の指示で長年にわたり神輿の先払いの獅子を出しており、また「去子年少々だし等町々より差出」されたおりにも、同町が神輿行列の一番を勤めて祭礼は無事に済んだ。したがって今年も同町を一番として獅子とだしを出させてほしい、というのがその内容である。

前年にも練り物としてだしを出した町があるという情報はここではじめて出てきたものだが、少しあとでみるように、ここである「だし」とは、「山車」のことである。⁽¹⁸⁾八日市場では、もはや鷹狩りの仮装行列のような単純な練り物では一番を保つことは困難だと考え、山車を準備したのである。

六月一日、前日の口上書を受けて三組役人は八日市場にたいし、獅子と山車をともに一番にすることはできない、当分獅子を出すのは止め、その替わりとして山車を一番にすると申し渡した。事実上、五月一六日の廻状を反古にしたといえる。その八日市場の山車は六日にはほぼ完成し、豊秋はこれを見物した。

八日に至り、事態は急変する。この日、川岸・浜宿・上中町がそれぞれ一番になりたいと申し出たのである。この申し出が妥当である理由として、川岸は同町居住の永沢治郎右衛門が個人で出している幟が厳密に言えば神輿行列の先頭だからということ、浜宿は同町に天王社があることを、上中町は同町に御旅所が置かれていることを挙げた。村役人ではこれを解決できず清浄院に仲裁を依頼したが、その仲裁もうまくいかなかった。

この状態を受けて九日になると、それぞれ本宿組と浜宿組の名主後見であった伊能三郎右衛門忠敬と永沢治郎右衛門が仲裁に乗り出した。忠敬は豊秋に次の案を示し、これをもとに取り扱い（仲裁）をおこないたいと伝えた。その案とは「当年[※]八ヶ市場彦番、来年よりくじ二仕、番次相定可申候、当年も式番よりくじの積候」というものであった。

豊秋がこの案に同意すると、忠敬は田宿・橋本町・寺宿の見解についても伝えた。八日市場が仲裁案に同意しなければこの三町は川岸・浜宿の支持に回るが、川岸・浜宿が仲裁案に同意しなければこの三町は八日市場も川岸・浜宿も支持せず中立を守る、という見解である。忠敬は最後に、川岸と浜宿への仲裁は治郎右衛門が当たっていると伝え、帰っていった。

この日はまた、八日市場では「だし、壺丈六尺之御祓 牛頭天王と申だし、幅六尺、土より式丈四尺少余、夕方町内不残引廻」した。同町では、牛頭天王と書いた御払い（御札）を飾った山車を作ったのである。その大きさと引き廻すという点からみて、この「だし」は明らかに「山車」である。

一〇日の浜下りは永沢治郎右衛門の当番だった。還幸時の各町の練り物の番次がまだ決まっていなかったが、この日、町々で山車を差し出す動きがあった。そこで混乱を恐れた忠敬は浜下りの延引を清浄院に提案した。しかし清浄院は町々は山車を出さないで例年どおり神輿だけで浜下りをおこないたいと述べた。実際、夜の五ツ半にはなつたが無事に浜下りは実施された。同日の「豊秋日記」の、刊本では「後略」とされた箇所には、上中町と下中町が川岸・浜宿を支持しているという情報が書かれている¹⁹。

川岸・浜宿・上中町は、仲裁案の、ひとまず当年も八日市場を一番にするという点に同意できなかったわけだが、下中町がこの三町を支持した理由は不明である。しかし下中町と上中町という本宿組の構成町が川岸・浜宿という浜宿組の構成町と足並みを揃えたことは、練り物の番次について、各町が所属の組にこだわらずに町ごとに判断し行動していたことを示している。

一日の朝、永沢治郎右衛門が伊能忠敬宅を訪れた。山車はその組内だけで引き廻すようにという触れが本宿組名主の藤左衛門から出された

そうだが、番次が決まるまではこれも引き延ばしたいと、治郎右衛門は忠敬に説明した。さらに、忠敬が本宿組諸町の山車を差し留めるなら、自分は川岸と浜宿の山車を差し留めると請け合った。忠敬はこれに同意した。

二人はさらに相談し、番次については「当年^一八日市場壺番、来年^二末壺番^二、年々番次^二而相定^二」めるという修正案を作った。当年の一番を八日市場とすることに変わりはないが、来年には同町を最終番に繰り下げ、他の諸町の順番は一つずつ繰り上げる、年々このように順番を回していく、と修正したのである。当年の二番以下については記されていないが、初案と同じく籤で決めるつもりだったのだろう。

それから忠敬は豊秋を訪れて右の次第を伝えたくて、修正案に同意を求めた。これによれば「当年壺番、来ル十年目二又壺番」となり、八日市場の若者たちは反対したが、豊秋は彼らを説得してこの案に同意した。

ところがまもなく、治郎右衛門の説得のほうはうまくいかなかったらしく、「河岸、^{ハヤ}浜宿だし罷出 天王御旅所江はまじく壺番^二而引出^二」という事態になった。

両町は、還幸日の前日ではあったが、ともかくも御旅所に最初に神輿を迎えに行けばその事実でもって当日の番次でも一番になれるかもしれないと考え、御旅所に罷り出たのである。そして結局、浜宿が一番乗りを果たした。

この事態をみた田宿・橋本町・寺宿の各行事は忠敬の家に来てどういうことかと詰問した。八日市場では若者たちが山車を引き出すべきだと騒ぎ出し、豊秋はこれを懸命に抑えた。そのうち川岸と浜宿の山車は御旅所から帰っていき、それぞれの町内で引き廻された。一方、上中町と下中町の「両だし」も組外に引き出された。

殺人も起きかねないほどの騒ぎとなったため、八日市場では三組名主

方へ今年は山車を出さない旨を伝えて山車を潰した。忠敬は田宿・橋本町・寺宿・八日市場への申し訳のため、親類である治郎右衛門にたいして義絶を申し伝えた。

一二日は、誰のどのような奔走が成功したのか豊秋は書いていないが、一転してどの町も山車を町外には引き出さなかった。このため、例年どおり山車を伴わない形で還幸がなされた。そのうえ囃子もなされなかった。騒擾をさらに激化させる恐れのある還幸日の山車の引き出しはひとまず回避されたが、番次の決定は翌年に持ち越されることになった。

二二日に、橋本町に先日の祇園祭礼を風刺する落書が出た。山車を引き出した諸町を皮肉った落書である。豊秋はこの諸町を「連判之者共」と書いているので、これら諸町が相互の協力を約定していたことが窺える。豊秋は落書を写したうえで寸評を加えているが、それから各練り物の特徴が知られる。

「河岸だしハごふくをつみ申候」とあり、川岸の山車にはおそらく人形が載せてあり、それに呉服を着せていたのであろう。「下中町、小野の道風、荒久、廿四孝」はともに荒々しさのない飾りだったため、「だしハそろく」と引き廻された。上中町については「新兵衛、仁兵衛にして人は中町」とある。意味不明だが、この翌年、同町は船屋台で踊りを演じているので、ここでも屋台を出してその上で人を踊らせていたと考えておく。踊り手はいても優秀な人材はいないと皮肉ったのであるのか。浜宿の山車は「芝居だし」で「だしの上二面人形つかい候」とあり、山車が人形浄瑠璃の舞台となっていたことがわかる。

この落書から荒久も山車を引き出していたことがわかる。都合五町が山車を町外に引き出したのである。

なお、刊本では略されているが、二五日に至って忠敬と治郎右衛門の間で和談が成立した。²⁰

(四) 付祭りの混乱の收拾

明和七（一七七〇）年五月二日条には、前年の騒擾が尾を引いている様子が記されている。豊秋は祇園祭礼の準備が各町で進んでいると述べたあと、「川岸町より右之御祭礼かさりもの相談、上中町・下中町・浜宿・荒久^江人遣相談仕候由、田宿・橋本・寺宿・八ヶ市場^江無沙汰、此義去年中儀二付、右之段御座可有候」と記している。

豊秋はさらに「畢竟祭礼殊二町事二候間、又々六ヶ敷義」になったと続けている。祭礼（ここでは付祭りの意）は町ごとになされるものなので難しい問題が生ずるのだという、豊秋的確な判断が看取れる。

組単位でおこなわれる神事だけでは豪家や組役人の意向が通りやすいわけだが、町ごとに練り物を出す付祭りが活発化するにおよんで町間の意向が対立するようになったのである。結果的には失敗に終わったが、前年に練り物の番次の確定が図られたのは、町間の対立がこのさき生ずることがないように付祭りの運営法を確立しようとしたものといえる。

六月一日条には、本宿組名主三右衛門の発言について記されている。彼はまず、豊秋と忠敬および田宿の利右衛門の三人にたいしてここ最近の自分の行動を説明した。

手前組之義ハ余町二不構^者田宿・橋本・上中町・下中宿^{ママ}・寺宿五町申合無難二御祭礼相勤候様可然候、尤祭礼之節村役人指図可仕間、違背仕間敷之請印、町々名代として行事可致旨申聞候処、橋本行事之内、小堀屋勘兵衛・津宮七右衛門、上中町行事甚之丞・伝右衛門・三右衛門・伝兵衛、下中町与兵衛・平右衛門・藤藏・源四郎、右行事共及違背二申候外、寺宿・田宿両町相違無之候、

上中町と下中町の行事ばかりか忠敬の居町である橋本町の行事のうち二人も、祭礼のさいに村役人の指図に違背しない旨の請印を押さなかったというのである。前年と異なり、橋本町の行事の一部も連判側を支持した形だが、その理由は不明である。それはともかく、組名主が組下の町の行事に請印を迫ったのにたいしそれを拒否した行事がいたことは、町単位で練り物を出す事態にたいしては組名主の統制も利かないことを如実に示すものである。

続けて、彼は自分の取るべき今後の処置について説明した。請印しなかった行事たちを行事不適格として江戸にいる幕府の代官に訴えるというのである。これを聞いた三人は三右衛門に翻意を促したが、果たせなかった。明けて二日、三右衛門は実際に江戸に向けて出発した。

四日には八日市場の行事たちのもとに浜宿組名主五郎兵衛より使いが来た。当年は八日市場から山車と獅子を出すのかという確認である。行事は、町内困窮のため、今年はどちらも準備していないと答えた。すると使者は、山車はともかく、獅子を出さないわけにはいかないのです、なんとかこれを出すようにと述べた。行事は町内でこの件を討議すると答えた。

五日、勝徳寺（荒久にあり）と清浄院から豊秋のもとに使いが来た。昨年から八日市場が難しい立場にあるので仲裁をしないと、内々に相談に来たのである。

九日条には、三右衛門がすでに代官より差紙を頂戴していることが記されている。これは印形を拒否した行事たちにたいする召喚状である。差紙の発行という一大事を受け、四組村役人中、本宿寺院、下宿の平右衛門が仲裁に乗り出した。⁽²²⁾一方、忠敬と豊秋は五郎兵衛の依頼により、三右衛門にたいして意見を述べた。それは、寺院を仲立ちにして橋本町・上中町・下中町にたいする書付を再びこの三町に渡し、行事たちに印形させるというものである。

一〇日も仲裁が続けられた。この日は、寺院、浜宿の三右衛門、下宿の平右衛門が仲裁をおこない、それにたいして三町の「若イ者共得心いだし申答二罷成申候、村役人^正申遣候」ということで、事態は好転した。その結果、浜下り当番の忠敬宅で一二日の山車の番次が全て籤引きで決められた。一番は上寺宿で、以下、下中町・浜宿・田宿・上中町・八日市場・川岸・橋本町・荒久・下寺宿となった（寺宿は上下でそれぞれ山車を出す）。

さらにこの場で一二日の還幸路も決められた。御旅所より上寺宿に出て、以下、下寺宿・八日市場・前原・新井宿・荒久・浜宿・川岸・橋本町・田宿・上中町（ここで御旅所に戻るであろう）、そして下中町と進むことになった。下中町のあとは天王社へ還る。

八日市場にかんしては「だしハ六番、ししハ先払」ということになったが、町が困窮していてこの両方を出すことはできなかった。役人たちは獅子を出すよう勧めたが、八日市場では「当年ハしし出し不申候」と決め、山車のほうを出すことにした。

そして一二日条には、この日実際に出された「だし之次第」が次のようにある。上寺宿は菊に猫、下中町は天草で拵えた虎、浜宿は忠度桜、田宿は鯉の滝登り、上中町は船屋台にて踊り、八日市場は代々御神楽、川岸は巫女舞い、橋本町は「かさばく」、荒久は相撲、下寺宿は猿の山車。このうち橋本町の「かさばく」は「笠鉦」であって山車ではなく、また上中町は踊り屋台であるが、他はだいたい山車の飾りについての説明だと思われる。⁽²³⁾

ところで、一〇日の「だしハ六番、ししハ先払」という記述から、山車を中心とした練り物の番次は幟・獅子・神輿・神楽から成る神輿行列とはべつに独立して組まれたことがわかる。前年の川岸と八日市場の主張のように、神輿行列の構成物の順番に合わせて練り物の番次を決めようとする、混乱を招くからであろう。練り物行列と神輿行列を分け、

前者が後者を先導することになったのである。ここに、二つの連続する行列から成る一つの大きな祭礼行列が成立した。

④その後の祇園祭礼

(一) 二つの年番制度の成立

明和四（一七六七）年から神輿行列が還幸のさいに本宿全町を通るようになったわけだが、そのため警護などの面から神輿行列の運営は複雑になったはずで、なんらかの運営方法が必要になったと考えられる。また明和七（一七七〇）年からは還幸のさいに練り物行列が神輿行列を先導するようになったが、その町順と交替法はそのうち変化しなかったのだろうか。これらの疑問に答えるために、まず現在の祭礼行列の運営方法を紹介する。

今日の祇園祭礼には、同祭礼の神事および神幸の監督も含んだ天王社の年中行事全般を統括する祭事年番（惣町年番・神輿年番ともいう）と、山車運営のみを監督する山車年番という、二つの年番が存在する。これについて、おもに『八坂神社行事運営要領』によりながら詳しく説明する〔八坂神社氏子会 一九八六〕。

現在、本宿には一三の町があるが、このうち山車を所有している一〇町が交代で両年番を勤めている。祭事年番の任期は一年で、会計年度は新暦の五月一日から翌年四月三〇日までである。山車年番の任期は昭和六〇（一九八五）年ごろまでは五年だったが、翌年、原則的に三年と改正された。山車年番の引継は年番最終年の祭礼中日におこなわれている（ただし祭礼終了時までは旧年番の責任）。

両年番は任期に違いはあるものの、年番を勤める順番については同一である。すなわち、八日市場・浜宿・寺宿・田宿・新井宿・船戸・下中

町・上中町・荒久・本川岸の順である。年番を勤めないのは上川岸と橋本町、そして利根川対岸に位置する向津（図1には無記入）である。

実際の祭礼の場では、神事のさいには祭事年番の役員を先頭に各町の役員が祭事年番順に並び（神幸のさいには獅子などが出るのでこの順では並ばない）、山車が行列を作るさいには山車年番の山車を先頭に各町の山車が山車年番順に並んでいる。

さて、江戸後期の年番制度も近現代という祭事年番に当たるものと山車年番に当たるもので同一の年番順をそれぞれ回していくという内容であったと考えられる。祭事年番の任期は一年で、会計年度は六月一日から翌年の五月晦日までであった。山車年番は付祭りの出された年に交替したものと思われるが（江戸後期と近代には付祭りは毎年出されたわけではない）、詳細は不明である。以上の論拠をこれから示していく。

第一に注目すべきは文政五（一八二二）年三月付の「差上申一札之事」という文書で、本宿一町の百姓代と町代が連印のうえ本宿組役人衆に提出したものである〔佐原市教育委員会編二〇〇一 一〇九―一一〇〕。

近年、天王社の修復が行き届かない。そこで、天王祭礼のさい、年によつては氏子町々より練り物・飾り物を出して神輿巡行に供奉しているが、人家の少ない小町である橋本町は当年より二十ヶ年練り物を出すのを休み、その分の費用を三組役所に差し出して積立金とし、天王社の修復に充てたい、という通知である。役人はこれを可として連印を加えた。重要なのはこのときの町々の押印順である。すなわち、八日市場・浜宿・両寺宿・田宿・新井宿・船戸・下中町・上中町・荒久・川岸・橋本町の順である。川岸はまだ本川岸と上川岸に分かれておらず、橋本町は練り物を出さないことになったが、以上を踏まえてこの押印順をみると、実質的に現在の年番順と同一であることがわかる。これはどうみても偶然の一致ではない。文政五（一八二二）年三月までの間に現在のそれに直接連なる形の年番制度が成立していたことがわかる。

第二に注目すべき文書は嘉永元（一八四八）年四月付の「乍恐以書付奉願上候」である〔同書一七一―一七二〕。この文書は、村役人惣代の本宿組由兵衛・下宿組の居作町代藤八・本宿組の下中町代長兵衛、それに二人の取締役（「村方後見」伊能茂左衛門と郡紋左衛門が連印のうえ地頭所に提出したものである）。

天保九（一八三八）年の天王祭礼のさい、喧嘩によって怪我人が出るという事件があり、地頭所は両祭礼を禁止した。そのうち神輿巡行のみは解禁されたが、練り物巡行は禁止されたままだった〔清宮二〇〇三一七〕。そこでこの文書で、本宿を代表して下中町が、新宿を代表して居作町（居造町）が、当年は両祭礼とも練り物を解禁していただきたいと願い出たのである（結局この許可は下りなかったが、本宿では練り物を出すことを強行した）。

前述の「差上申一札之事」に記された年番順が八日市場から川岸まで一年ずつ順調に交替して何巡かしていたと仮定すると、嘉永元（一八四八）年四月の年番は下中町になる。よってこの文書で下中町代が押印しているのは、同町がこのとき実際に年番だったからということになる。したがって文政五（一八二二）年三月の八日市場も嘉永元（一八四八）年四月の下中町もともに祭事年番であったことが確認でき、その任期が一年だったこともわかる。

第三は、嘉永四（一八五二）年三月付の「為取替申議定一札事」という文書である〔佐原市教育委員会編二〇〇一―一〇一―一〇一〕。この文書は、本宿の一一町の惣代（町代に同じ）が連印のうえ橋本町の惣代に宛てたものである。

内容は、このころ橋本町が再び練り物の不参加を惣町に申し出た、ちよūd神輿が大破していたので、その造立費用のうち一五〇両を橋本町が惣町に差し出し、かわりに当年より二十ヶ年練り物を出さないことに決まった、という通知である。

押印順は、本川岸・八日市場・浜宿・両寺宿・田宿・新井宿・船戸・下中町・上中町・荒久・上川岸である。荒久のあとの川岸が分町し、そのまま荒久のあとで上川岸・本川岸の順に年番を勤める形になっている。ただし分町したばかりだったのかどうか、上川岸はまだ祭事年番を勤めていなかったようである。というのは、嘉永元（一八四八）年四月の祭事年番が下中町だったので、嘉永四（一八五二）年三月の祭事年番は本来ならば上川岸であるはずなのに、これを跳ばして本川岸の惣代が最初に押印しているからである。

第四の文書「祭礼一件被仰渡之写」は第三の文書と同じ嘉永四（一八五二）年のもので、作成月は八月である〔同書一七三―一七四〕。これは、「本宿字拾四ヶ所」の町代のうち「重立候もの惣代」である八日市場の二名と上中町の二名および村役人惣代である二人の名主が地頭所に宛てた詫び状である。

付祭り禁止の措置は続いていたが、本宿諸町では嘉永元（一八四八）年の祇園祭礼に「家臺練物等さし出し夫々御咎被仰付」た。それにもかかわらず、当嘉永四（一八五二）年に本宿諸町は再び付祭りを実施した。そのため地頭所では右の一四箇所にたいして過料一〇〇貫文を科すなどの処罰を申し渡した。この文書はそれに従う旨を約したうえで謝罪したものである。

嘉永四（一八五二）年三月の祭事年番は本川岸で、同町が本宿諸町のなかで最初に押印していたが、同年八月には八日市場と上中町のみが押印している。本川岸の次は八日市場が年番を勤める順番なので、ここでの八日市場は明らかに祭事年番として押印している。すると、これと対になっている上中町は山車年番であろう。付祭りの禁止にたいする違反ということで、神事・神幸を監督する祭事年番だけでなく山車運営を監督する山車年番も詫び状に名を連ねたと推測される。

ここで会計年度について説明しておく。上川岸（本上川岸・本町）が

明治二七（一八九四）年新七月に作成して昭和四（一九二九）年まで書き継いだ「諸事記憶録」⁽²⁶⁾には、以前の各祭事年番が本宿惣町の諸人用にかんして作成した多数の書類の目録が収められている。祭事年番（たんに年番と書かれていることが多い）が本宿各町から分担金を集め、それを入用帳に記して次の年番に送っていたのである。

目録中の最古の書類は「御興遷宮奉納帳 嘉永四年戊戌六月一日 年番本川岸町」である。つまり本川岸は戌年の嘉永三（一八五〇）年六月一日に祭事年番に就くと早速この入用帳を作成した。この日から一年間が祭事年番の任期で、同町は翌嘉永四（一八五一）年六月一日に八日市場にこの役を引き渡したと考えられる。この交替の前後の時期に書かれたのが、さきにみた「為取替申議定一札事」と「祭礼一件被仰渡之写」である。

書類目録に収められた各書類の起筆年月と作成年番をみると、やはり明治前中期のものも、臨時の惣町入用にかんする書類はべつにして、ほとんどの惣町入用帳の作成時期が旧六月または旧六月一日となっている。翌年五月晦日までそれが使われたようである。このことは、作成時期だけでなく記入終了時期まで書かれた「諸人費割金帳 廿六旧六月より廿七旧五月迄 年番本川岸町」という書類からも確認できる。

なお「諸事記憶録」には、明治二七（一八九四）年旧六月一日に本川岸から上川岸が祭事年番を引き継いだことも記されている。幕末の「為取替申議定一札事」では荒久のあとは上川岸・本川岸の順で年番が回ることにはひとまずなっていたが、何か混乱があったらしく、明治時代にはこれが逆になっており、本川岸・上川岸の順となっている。

ところで、おもに書類目録を参照すると、祭事年番を勤めた順番が明治六（一八七三）年旧六月から二十余年にわたって確認できる。

最初の一巡は八日市場・浜宿・寺宿・田宿・新井宿・船戸・下中町・上中町・荒久・本川岸・上川岸の順となっている。ついで明治一七（一

八八四）年旧六月には再び八日市場が祭事年番となっているが、このころ橋本町が年番制度に復帰したらしく、翌年旧六月からの年番は同町が勤めている。そのあと三年間の順番は一巡目と同じで、浜宿・寺宿・田宿と続いている。しかし次の新井宿は年番の受取を拒否したらしく、これを跳ばして船戸・下中町・上中町・荒久・本川岸・上川岸と続いている。そして明治二八（一八九五）年旧六月にはまた八日市場が年番となっている。

若干の修正が加えられることはあったが、それでも、遅くとも文政五（一八二二）年三月には成立していた年番制度がほぼそのまま今日まで踏襲されているといえる。

山車年番に当たるものについては明治一〇（一八七七）年ごろに書かれた「（佐原年表）」に言及がある。その明和五（一七六八）年条に「引物町々出ル（中略）、惣町混雑出来扱立入以来年々町々互番二一番二相成候様取極ル」とある（佐原市教育委員会編二〇〇一「一七五」。一年ずれているが、これは明らかに明和六（一七六九）年に忠敬と豊秋の間で合意をみた練り物番次の修正案を指している。練り物行列が付け出された年ごとに町々が一つずつ順番を繰り上がり、先頭を交替していく形である。

豊秋の時代には祭事年番は存在していなかったため、年番制度は本来、山車を中心とする練り物行列の町順から生じたと考えられる。それが神事・神幸にも転用されて祭事年番が出現したのは間違いない。

しかし明和七（一七七〇）年に決まった練り物行列における町順は、文政五（一八二二）年三月の年番順とはまったく異なっている。したがって、詳細は不明だが、この間に町順に変更が加えられ、さらにその変更された一種別の町順にもとづいて任期の異なる二つの年番が回されていくことになったと考えられる。

ところが実のところ、江戸後期の山車年番順が祭事年番順と同一だった

たということを示す史料はない。というより、山車年番に言及していると思われる史料じたいが「祭礼一件被仰渡之写」ぐらいしかない。

しかし明治時代については、「諸事記憶録」に記事がある。これは明治三六（一八九三）年旧六月一日付のもので、次に引用する。

山車年番ハ当本上川岸町本年ニテ五ヶ年ノ年期満了ニ付、本日世話役渡辺市太郎氏須本源治郎氏惣町ノ定例会^五出席シテ次ノ年番八日市場町根本仙助氏外^五名^五交渉シ此責任ヲ送ルコトヲ相互ノ間ニ決定候

これによるとまず、明治後期の山車年番の任期は最長で五年だったことがわかる。しかし諸般の事情で五年ごとに規則的に付祭りが実施できなかったわけではないので、五年というのは目安であって実際の運営においては微調整がなされていたと思われる。また、この当時の山車年番の引継は祭事年番と同じく旧六月一日であったこともわかる。それよりもここで重要なのは、祭事年番順と同じく上川岸の後番が八日市場となっていることである。山車年番順の全体が示されているわけではないが、これはやはり明治後期の山車年番順が祭事年番順と同じだったからではないだろうか。

年番制度は本来、練り物行列の町順から生じたと考えられる。そして今日の二つの年番順は同一であり、それは遅くとも文政五（一八二二）年から続く祭事年番順を踏襲したものである。さらに、新宿諏訪祭礼では明治一〇（一八七七）年一月に年番制度が採用されたが、それは各町が一つの年番順で神輿年番と幣台年番（本宿の山車年番に当たる）を勤める形であった。²⁷

以上を踏まえると、江戸後期にも本宿祇園祭礼の二つの年番順は同一であったと考えられる。新宿では明治初期にこれに倣って年番制度を採

用したと推測される。

要約すると、成立過程の詳細は不明であるが、明和年間（一七六四～一七七二）に祭礼行列が大規模化したことと練り物の番次の交替法がひとまず定まったことを契機として、文政五（一八二二）年までに一つの年番順にもとづく二つの年番制度が成立した、ということである。こうして、練り物行列だけでなく神輿行列の監督も町々が勤めることになり、町々は自らが勤める祭礼の主役の座を安定させたのである。

（二）練り物行列・神輿行列・囃子勝負

まず、還幸のさいの神輿行列の構成と練り物行列の番次はその後とも無関係であったことを指摘しておく。さきに引用したが、「御遷宮」には一九世紀初頭の神輿行列の構成について、行幸・還幸ともに幟・獅子・猿田彦・神輿・神楽の順とあり、これには付祭りとしての練り物は含まれていないからである。これは近代にも無関係であった。そして戦後になると練り物行列が神輿行列を先導する形式は廃され、いくつかの行事のさいを除いて各山車は行列を作らずに自由に引き廻されるようになった。

次に神輿行列の順路について、行幸路と還幸路の順にみていく。

「御遷宮」に記された行幸路にかんする記事は錯綜している。問題の「六月十日 天王宮御濱下」という条は、まず祇園祭礼の成立を記した「景利日記」元禄一六（一七〇三）年六月一〇日条の記述をほぼそのまま書き写した文で始まる。

しかし途中から「依之、此年より相改、爾今、御本社より御輿出し、荒久・新井宿・八日市場、本宿通り、橋本へ御出」という文に替わる。「景利日記」の該当箇所は「依之、今年より相改り、六月十日ニ御輿御浜下ニ出、夫より十二日暮方迄大工治兵衛前へ御旅致」である。元禄一六（一七〇三）年の行幸と還幸はいずれも町々を広く廻るものではなかつ

た。ところが「御遷宮」では、「景利日記」にはない奇妙な文を載せてこの年から広い範囲で行幸がなされたとしているのである。

この差し替えられた文は、どうも「部冊帳 前巻」四八三頁の「覚書」後半部に記された、正徳四（一七一四）年に拡大された行幸路「浜宿より荒久・新井宿迄参、新井宿よりまがめ・八日市場通り、橋本迄参候」を短く書き直した文ではないかと思われる。

ようするに景敬はこの条において、先祖の景利が残した二つの記録を混合させて浜下り神事と行幸路にかなする話をまとめてしまい、正徳四（一七一四）年に拡大された行幸路を誤って元禄一六（一七〇三）年からのものと記してしまったのである。

それはともかく、「御遷宮」にはほかに行幸路にかなする記述はないので、正徳四（一七一四）年の行幸路がそのまま一九世紀初頭にも踏襲されていたのではないかと思われる。

時代はかなり下るが、大正七（一九一八）年に「年番本上川岸町」が作成した「本宿總町事務日誌」⁽²⁸⁾にこの年の行幸路が記されている。それには、神輿は天王社を出て浜宿・荒久・新井宿と進み、新井宿より反転して荒久を経て八日市場を通り、下中町・上中町と進んで橋本町に至り、そこで浜下り神事がなされて上中町の御旅所に納められる、とある。これは正徳四（一七一四）年の行幸路とまったく同じである。

享保一〇（一七二五）年に広い範囲で行幸がなされたことは例外として、正徳四（一七一四）年の行幸路が変わることなく大正時代にも踏襲されていたことになる。

景敬は「御遷宮」の「六月十二日 御祭礼」という条のなかで、一九世紀初頭の還幸路についても記している。

但、当時一年者橋本・田宿・川岸・濱宿・舟津・荒久・新井宿・八日市場・下中町・上寺宿・下寺宿、一年者下中町・下上寺宿・八日

市場・荒久・新井宿・濱宿・舟津・川岸・橋本・田宿と相廻り御旅所へ奉入候

この当時は一年おきに二つの順路を廻ることになっていたという。上中町の名がないのは、引き続き同町に御旅所が置かれていたからである。やはりいったん御旅所に戻ってから、天王社へ還御したことが窺える。

還幸路が本宿全町を通るという点は近代でも同じであったが、「諸用留」⁽²⁹⁾に収められた明治二七（一八九四）年と翌二八（一八九五）年の記事には、年ごとに祭礼直前に還幸路を定めていたことが記されており、その順路はいずれも「御遷宮」の二つの還幸路とは異なっている。

前者の記事には、還幸路の記述のまえに「明治廿七年旧六月一日ヲ以テ、御輿順廻ヲ総町協議之上改正ス」という説明がある。ただしこの説明が「御遷宮」の還幸路をこの年はじめて改正したということの意味しているのか、それともこれ以前にも改正があったことなのかまではわからない。しかしいずれにせよ、還幸路は行幸路ほどには安定していなかったといえる。

神輿行列の構成物についていえば、獅子・猿田彦・神楽は現在まで変わることなくそれぞれ八日市場・新井宿・浜宿から出されて神輿の前後を守っているが、四つの豪家から出されていた幟は戦前に廃されている。

昭和三二（一九五七）年に当時の天王社祢宜の椎名周四郎が書いた記録⁽³⁰⁾には、「伊能三郎右衛門・伊能茂左衛門・永澤治郎右衛門の門閤家から、祇園祭御神幸の御案内として順路の先頭に左図の旗を持ち廻った（昭和六年、八日市場年番まで出たが其後は出現しない）」とあり、三種の幟が描かれている。伊能権之丞家のみは昭和六（一九三一）年よりもまえに幟を出さなくなっていたということである。

さて宝暦・明和年間の還幸では、神輿は御旅所を出たあとしばらくしてから御旅所に戻り、そこからすぐには天王社に還らず、本宿通りで町

対抗の囃子勝負がなされていた。この勝負のその後についてもみてみよう。

「天保」と「嘉永」には、寛政九（一七九七）年を最後に囃子勝負はなくなったとする伝承が記されている。両者の記述はほぼ同様であるが、ここでは「天保」から引用する。

本宿鎮守、寛政九巳年まではやし御座候節、年々勝負十三日明六ツ時迄二御座候、明六ツ迄二勝負不附節^者、長沢次郎右衛門・伊能三郎右衛門^正別当差添貰受、神納致候古例二申伝候

しかし一方、文化七（二八一〇）年ごろに書かれた「御遷宮」では、「六月十二日 御祭礼」の条に囃子勝負にかんする簡単な言及があるが、これが消滅したとは書かれていない。ただ管見のかぎり、江戸後期の一次史料に囃子勝負の存在を窺わせる記述が皆無であることもまた、確かである。

断言できるだけの史料はないが、寛政九（一七九七）年が最後であったかどうかはべつにして、少なくとも景俊が「天保」を書いた天保一〇（一八三九）年には、やはり囃子勝負はなくなっていたのではないだろうか。自分の村内に現に存在しているものにかんして、すでにそれが消滅しているとは、普通誤解しないであろうから。

囃子が神輿から山車に移った結果が『利根川図志』に記されている〔赤松 一九三八 三二三〕。佐原村の

両祭礼至つて賑はしく、何れも二重三重の屋台十四五輛づ、花をかざり、金銀をちりばめ錦繡の幕を懸け、囃子^{はやし}もの、拍子いとにぎやかに、町々をひきまはる。

二層構造（二重三重とある）の屋台を豪華に飾り立て、その屋台は囃子方を伴っているという。近現代にみられる屋台と同じ形態の屋台がすでに幕末に存在していたことが知られる。

むすび

近世初頭以来、佐原村の本宿では伊能三郎右衛門家が本宿組を、永沢治郎右衛門家が浜宿組を率いて村政に当たっていた。江戸時代の多くを旗本領として過ごした佐原村では武士の居住がなかったため、江戸にいる領主の意を汲んだ在地の有力者である豪家の果たす役割は大きかった。村政を預かる者としては、政治的地位のほかにある程度の宗教的權威も必要であった。佐原村きつての名社であった天王社の経営に關与することは、この点で有効であった。

この一環とみて間違いないが、遅くとも元禄年間（一六八八―一七〇三）までに、両家は天王社の二つの神事、すなわち六月一〇日の浜下り神事と六月一二日の祇園神事の当番を、配下の組を通じて一年ごとに入れ違いに勤めていた。自宅を神事執行本部として、氏子の代表として祭祀にかかわっていたのである。これは氏子の代表としての義務であると同時に、自己の宗教的權威を組下の者に明示し確認させる機会でもあった。また祭礼成立後に盛んになっていった他者にたいする当番時の料理の提供は、自己の富と社会的地位を他者に明示し確認させる機会でもあった。

元禄一六（一七〇三）年に至り、天王社別当の清浄院の求めにおうじて両神事の關係が改変された。両神事の内容自体は変わらなかったのだが、その間に結合が生じたといえる。従来は浜下り神事が済むとその日のうちに神輿は天王社へ帰還していたが、両神事の際に御旅所への逗留を挟むことで一つの連続する祭礼が創り出されたのである。その結果、

神輿の移動は、一〇日に御旅所へ行幸し一二日に御旅所から還幸するという、神幸の意味合いをもつようになった。

そうすると、御旅所と神幸が重要になってくる。宝永三（一七〇六）年には本宿組内の三町による寄進があつて御旅所が整備された。正徳四（一七一四）年には別当と氏子の相談の結果、神幸の範囲が拡大されて神輿の通る町が増えた。それに伴い神輿にたいする囃子も盛んになっていった。また、各種の祇園芝居が盛んに開かれたほか、享保一〇（一七二五）年には多くの町から練り物が出されるということもあった。そして享保一〇（一七二五）年からあと、宝暦年間（一七五一～一七六三）以前に先払いと後押さえが神輿に随う形が定まり、神輿行列の整備も進んだ。こうして両豪家の主導する神事とはべつに、神幸を中心として祭礼が発展していった。

宝暦・明和年間（一七五一～一七七二）年には、さらに還幸路が拡大していった。神輿が多くの町を通るようになると、それにかんする町々とその行事たちの役割も強まっていった。

まず、宝暦一四（一七六四）年の川岸の要請による還幸の拡大を受け、村役人の指示で町々の行事たちが若者たちとともに神輿の警護に当たるようになった。しかしこのときの還幸には不手際があり、そのため明和二（一七六五）年の還幸では、川岸は村役人の統制を無視したうえで神輿を損傷させた。明和四（一七六七）年には、還幸路は本宿全町に及んだ。村役人にはこれを常態化する意志はなかったが、明和五（一七八）年に諸町の行事の総意で還幸の全町廻りが確立された。これを受けて同年から、氏子各町は還幸時の神輿巡行にたいする付祭りとして本格的に練り物を出すようになった。

しかしこのとき、神輿行列の先頭をめぐる町間で対立が生じ、明和六（一七六九）年には両豪家や村役人の統制も利かないほどに激化した。問題は、既存の神輿行列にどのような順番で復活した練り物を組み入れ

るか、ということであつた。練り物は町単位で出されたため、町間の対立は組間の利害関係とは無関係であつた。そのため、組を代表する豪家や名主には解決が困難だった。

明和七（一七七〇）年の祭礼直前には、本宿組の名主が配下の諸町のうちの三町の行事を抑えることができず、江戸の代官を訪ねて彼らを訴え出るまでに事態は悪化した。代官による差紙の発行を受けてようやく事態は好転し、籤引きによって順番が定まった。

その結果、練り物は神輿行列とはべつに一括され、神輿行列の還幸を先導する形になった。練り物行列と神輿行列とで、全体として一つの大きな祭礼行列を形成することになったのである。

組は、近世初頭には豪家を中心とした複数の社会的・地域的まとまりであつたが、元禄八（一六九五）年の佐原ではすでに町場が広く展開し、享保元（一七一六）年の本宿には少なくとも九つの町が存在していた。

そのため村内居住者にとっては、組という大きな集団を通じて動くだけでなく、そのなかの町という、小さくはあるがより緊密な集団を通じて動く機会も増えてきたと考えられる。享保元（一七一六）年の幕府の巡見使の通行にさいし、さきの九町それぞれに人足が割り当てられているのはその証である。さらにまた、形成過程はよくわからないが、宝暦年間（一七五一～一七六三）には町々に行事が存在している。これは、この時期すでに町が明確な社会的・地域的集団として完成していたことを示している。

いくつかの町の行事たちは還幸の全町廻りを契機に自町の練り物の可視的な優越（神輿行列で他町の練り物よりさきに位置するという優越）を求めて、「組内の」町の代表としてではなく「個別の」町の代表として、豪家や組名主と渡り合った。

ここで注意しておくべきは、祭礼における町の役割が強まった宝暦・明和のころに、べつに両豪家の地位が下がっていたわけではないという

点である。むしろ両家とも、名主の世襲をせずとも村政に影響を及ぼせるほど地位が向上していた。

近世中後期の伊能三郎右衛門家の経営を分析した酒井右二は、結論として次のように述べている。この時期の同家の「経営は、土地集積の面でも諸営業の面でも享保末―宝暦期に経営拡大が本格的になり、その後文化期に至るまで順調な発展を示している」〔酒井 一九八八 一二〕。この発展が背景にあったからこそ、晩年の伊能忠敬は全国測量に勤しむことができたのである。

永沢治郎右衛門家では仁右衛門景寿のあと治郎右衛門征俊（？）一七六三）が出て家運と名声を高め、宝暦八（一七五八）年には幕府から一代限りの帯刀と永代までの苗字の名乗りを許されるに至った〔小島 一九七八 八〇〕。その子孫も繁栄し近世後期には領主の津田氏や近辺の多古藩の財政に関与するまでになった〔千葉県立房総のむら編 一九九二 二一―二二〕。

しかしながら、還幸にさいしての神輿行列の全町廻りと練り物投入の本格化は神輿巡行に関連して生じた事態であり、それらは町々の意向によってなされる形を取った。そのため、組単位で両神事を運営してきた豪家と組単位で作られていた村政機構はこの事態をめぐる町間の対立にうまく対応できなかった。村政機構は、最終的には幕府代官の威光をもってようやく町間の対立を収めることができた。

もとより、「御遷宮」をみるかぎり、両神事における三郎右衛門家と治郎右衛門家の役割は文化七（一八一〇）年ごろにも変わっていないかった。そして遅くとも文政五（一八二二）年までには神事の運営は引き続き二つの豪家が、練り物行列と神輿行列の運営については諸町が年番制度にもとづいておこなうという仕法が成立していたと考えられる。

佐原村本宿の祇園祭礼の成立過程と展開過程をまとめると、次のようになる。もともと本宿には、宿内の二つの豪家がそれぞれ配下の組を動

員して運営していた二つの神事が存在した。これに御旅所への神輿の逗留と神幸が加わり一つの祭礼が成立した結果、在郷町として発展していた村ないし組の内部に成立していた町々が徐々に祭礼行列の運営の中心となっていく、彼らが祭礼の主役となったのである。

註

- (1) 信州諏訪大社に古代以来伝わるもので、七月末の数日間に諏訪大社近くの狩り場（御射山）で神贄を狩って神前に供える神事。
- (2) 「屋台」ではなく「山車」または「幣台」という呼称もある。江戸後期から今日に至るまで「屋台」と呼ぶのが普通であるが、佐原では通常、三つの呼称に意味上の差はない。ただし江戸中期の「豊秋日記」（後述）では、引き物の総称にはほとんど常に「だし」という語が使われているが、その一方、人形などの飾り物を載せた引き物を「だし」、台上に人間を乗せて踊りを演ずる引き物を「屋台」と称して書き分けている箇所もある。「景利日記」（後述）にも「屋台おとり」という表現がある。つまり「だし」と「屋台」が別義に用いられたこともあった。しかし、踊りの移動舞台という意味での屋台は江戸後期に消滅したようである。
- (3) 佐原市の分館司家文書には「御検地水帳」と同内容の「佐原之郷御繩打帳」という記録がある。同じ記録が複数作成されたのであろう。その表紙に、「案内者」は「新宿 六郎右衛門」と「同 四郎左衛門」、および「門」と「同内匠」とある〔海上町史編さん委員会編 一九八五 六四七―六四八〕。判読不能な文字の多い「門」の箇所は「本宿 弥左衛門」であったと思われる。
- (4) 酒井右二「一八世紀後半の佐原―「村」政機運営の変容と「町」組織の成立―」、国立歴史民俗博物館基幹研究「日本における都市生活史の研究―都市の地域特性の形成と展開過程―」研究会における口頭発表原稿による（二〇〇二年二月二十四日、於・国立歴史民俗博物館）。
- (5) 天方氏は享保一五（一七三〇）年に青山と改姓した〔川口 二〇〇一 一七〕。
- (6) ちなみに残りの一〇町、すなわち新宿に属すると思われる町は、上河岸・中河岸・下河岸・上新町・下新町・上宿・上中宿・下中宿・下宿・関戸である。
- (7) すぐあとで述べるとおり明和五（一七六八）年の新井宿組は家数も人口も五組中で最少であった。この組は村の中心部から外れた農業地域で広さのわりに家数も人口も少なかったためにそのなかに複数の町が形成されず〔小島 二〇〇

○七、他の四組の内部に町々が形成されたのを受けて、組がそのままの形で町と同義とみなされるようになったと考えられる。

(8) 舟戸の位置する土地は小野川の土砂の堆積でその河口が北進した結果、徐々に形成されたもので、宝暦・明和のころ(一七五一―一七七二)にはまだ狭い町であった「香取一九八七二〇」。組の成立からかなりあとに組の領域外に形成された土地に町が成立したと考えられ、そのため組への所属が曖昧だったのではないかと考えている。

(9) 天王社と同じく浜宿にあったが、明治二(一八六九)年に廃された。

(10) 「天保」と「嘉永」にはまた、天和三(一八六三)年の天王社造営にかんする伝承も記されている。内容はほとんど同じである。それによると、このときの造営は新宿の天王台(現在の諏訪台字天王台)にあった別の天王社を本宿の浜宿へ遷座する形でなされ、里方の新宿惣代は伊能茂左衛門と伊能権之丞が、貫方の本宿惣代は伊能三郎右衛門と永沢治郎右衛門が勤めたという。権之丞だけでなく、茂左衛門も造立に関与したというのである。本宿側でも伊能三郎右衛門だけでなく、永沢治郎右衛門も造立に関与したとしている。また「天保」では、祇園祭礼において今もってこの四家から幟が出されているのはこのときの由緒によるものだとしており、さらに「嘉永」では、それは「小のほり式本ツ、」であるとしている。この伝承の真偽は不明である。

現在、天王台には「八坂神社奥宮」と呼ばれる石製の小祠が立っており、その銘文によると奉納年月は「享保五年二月吉日」で奉納者は「上町ノ吉田権助」である。享保五年は一七二〇年である。上町という町は佐原にはないが、新宿上宿組に属する上宿町のことかと思われる。遷座の伝承が事実とすれば、遷座後三十七年を経て、新宿天王社の跡地あたりにこの小祠が建てられたということになる。しかし伝承の真偽もさることながら、この小祠がそもそも牛頭天王を祀るために建てられたものかどうかさえ、小祠そのものからはわからない。

なお、この銘文を「享保壬子年十二月吉日」「上町ノ吉田桂助」と読む説もあるが「佐原市役所編一九六六 九五八―九五九」、誤読である(享保壬子年は享保一七(一七三二)年に当たる)。

(11) 「御遷宮」に、永沢治郎右衛門家での神事の中断について次のようにある。この記事はかなり正確である。

但、中興次郎右衛門役儀相休、江戸へ罷出候節、跡役長兵衛・八郎兵衛・吉左衛門二勤、元禄十六末年より権之丞、本田名主被仰付候以来も新田名主吉左衛門方二致し、其跡、正徳三巳年九月より仁右衛門方へ引渡候二付、

是より前々之通、永沢次郎右衛門方二爾今相勤来候

中興次(治)郎右衛門とは六代目俊賢(一六五四―一七〇四)のことで、天和三(一六八三)年九月の文書「部冊帳 前巻」四五九―四六五への署名を最後に浜宿組の名主役を退いている。香取五郎の調査によると、彼はそのち元禄三(一六九〇)年に年貢の未納と多額の借財という理由で江戸へ奉公に出たが、宝永元(一七〇四)年三月に村政書類の引継の遅滞などの罪状で入牢し、五月に牢死したという。香取は、幕府に禁じられていた日蓮宗不受不施派に俊賢が属していたことを明らかにし、それが彼にたいする弾圧の実際の理由であるとしている。また、俊賢入牢の知らせを受けた伊能景利は俊賢の息子の助命嘆願をし、その甲斐あって彼は助命されて出家した。ほどなく治郎右衛門家では俊賢の娘婿で景利の弟でもある景寿(一六七六―一七四八)が家督を継ぎ、仁右衛門と称した「香取一九九七」(景寿以後の当主は再び治郎右衛門を名乗っている)。

俊賢の退役後、浜宿組の名主は長兵衛・八郎兵衛・吉左衛門など他家の何人が数年ずつ勤めた「部冊帳 前巻」随所。元禄一六(一七〇三)年五月からは、当時の名主吉左衛門の願いにより、佐原村の浜宿組名主を伊能権之丞(三代目景胤。一七二二)が新たに勤め、新嶋領佐原村新田の浜宿組名主は引き続き吉左衛門が勤めることになった「同書二六五」。それまでは、佐原村(新田にたいして本田という)の四組の名主がそのまま各組所有の新田の名主を兼任していたが、新田への移住者の増加に伴い、これ以後は本田の名主と新田の名主が分任される傾向が強まったという「酒井一九八五 三〇七―三〇九」。

「景利日記」では、吉左衛門の家で当番がなされていることが宝永元(一七〇四)年六月一〇日条に初見し、以後は宝永二(一七〇五)年と四(一七〇七)年の各六月一二日条に浜宿組の当番は彼の家でなされたことが記されている。おそらく「御遷宮」にあるとおり、俊賢退役後は、吉左衛門にかぎらずその時々

の浜宿組名主の家で当番がなされていたのであろう。そして元禄一六(一七〇三)年五月の浜宿組名主の分任以後は、いかに本田浜宿組の名主であったとはいえ新宿側にある伊能景胤の家で本宿天王社の神事の当番を勤めるわけにはいかなかったもので、引き続き新田浜宿組名主の吉左衛門の家でこれを勤めていたのである。

その後、治郎右衛門家の地位の回復に伴い、同家で当番を勤めることも回復した。正徳四(一七一四)年二月の文書に佐原村新田の四名主の一人として「仁右衛門」の署名があり「部冊帳 前巻」四二九、彼がこのときすでに新田浜宿組名主の役を吉左衛門から引き継いでいたことがわかる。同年の「景利日記」

は欠けているが、この年から同家は当番に復帰したのではなからうか。

当番の回復がはっきり確認できるのは「景利日記」の正徳五（一七一五）年六月一〇日条で、ここに「御浜下御祭礼当番浜宿組二（一）、仁右衛門所二（二）動」とある。以後も変わらず浜宿組の当番は彼の家でなされたことが、「景利日記」の残りのすべての巻から確認できる。

ちなみに宝永三（一七〇六）年、新宿では市の運営をめぐる混乱が生じ、翌年一二月に興津氏は本田下宿組名主の伊能茂左衛門を罷免し、宝永五（一七〇八）年一月に景胤をその後役に任命した。ここに景胤は本田の浜宿組と下宿組両方の名主を兼任することになった。景胤の跡はその息子の智胤（？）一七四九）が、少なくとも享保一九（一七三四）年までは兼任を続けていたことが知られる。「部冊帳 前巻」「部冊帳 後巻一」「部冊帳 後巻二」随所。千葉縣史編纂審議會編一九五八 九九一〇〇。清宮二〇〇三 八一。など。

(12) 「景利日記」の正徳元（一七一）年の巻では浜下り神事は本宿組の当番で祇園神事は浜宿組の当番となっているが、欠巻を挟んだ正徳五（一七一五）年の巻では浜下り神事は浜宿組の当番で祇園神事は本宿組の当番となっている。毎年両当番を同組に入れ替えるという原則からすれば、正徳五（一七一五）年の当番担当は逆になっている。この理由は不明だが、ひとまず、神輿の大破によって正徳三（一七一三）年の祭礼が早い段階で中断されたため、翌年の祭礼は当番を替えずに執行され、ずれが生じたという仮説を立てておく。

(13) 「御遷宮」に次のような伝承が記されている。本宿の祇園祭礼が終わった翌日の六月一三日に新宿では家ごとに祇園の祝事として客を呼んで素麺を振る舞っていた。ところが享保の末に下宿組名主伊能権之丞（四代目智胤）の発意で諏訪台の中腹にあった諏訪神社を頂上に遷して建て替えた（現在地に同じ）。これに合わせ七月二七日が同社の祭日（御射山祭りの祭日）であったところを八月へ移して「新二祭礼相企」て、これを受けて町々より賑々しく出し物が出された。そしてこのころから新宿では祇園の祝事はなくなったという。

ここでいう遷宮・造営とは享保一八（一七三三）年になされたものを指しており、この年から御射山の神事に付祭りが導入されたとしているのである。この伝承の真偽は不明だが、祇園祭礼が新宿側の人間にも影響を及ぼしていたことを示す内容といえる。

さらに、「御遷宮」には本宿の年中行事の一つとして「五月晦日、別当清淨院、本宿新井宿上宿村離五人足召連罷越、戸メ辻切取行有之候」とある。戸メ辻切は除厄儀礼の一種である。天王社の別当ならば本宿だけを除厄すればよさそうなものだが、実際には佐原村の東端（新井宿組の外れ）と西端（上宿組の外

れ）を除厄している。穢れが村内に侵入するのを防ぐためである。この儀礼がいつごろからおこなわれていたのかは不明だが、これもあるいは、新宿においても天王社の占める地位が高かったことに由来するものかもしれない。

(14) 組頭などは相談したとあるが、名主への言及はない。この条にかぎらず、「景利日記」中の祇園祭礼にかんする記述では本宿組名主にかんする言及がほとんどない。その理由は簡単で、景利が正徳三（一七一三）年に本宿組名主を退役すると、嫡男昌雄（一六九二―一七四三）がその後任となり、享保一五（一七三〇）年までこれを勤めたからである。「酒井 一九九七 五四―五五」。退役後も引き続き景利が中心となって自宅で当番を勤めていたので、同居していた昌雄の行動がほとんど記されなかったと考えられる。

(15) 新井宿には、特定の家々によって構成される天狗組合という世襲的な組織がある。現在、この組合に属する家の若者を猿田彦役に選んで、その面と衣装を着せて毎年神輿行列に出している。

この組合の現状は「千葉県立房総のむら編一九九二―一〇七―一〇八、一一九」に詳しく報告されているが、その歴史にかんする記述は誤解を招くものである。この報告書作成のための調査で「天狗組合が正徳四年（一七一四）一月五日に発足した」という古文書があることを知った」として、さらに「平成二年度に八坂神社宮司立会いのもと、天狗組合の役員が古いオニツキ箱の中の古文書を見て天狗組合の発足年月日を知ったが、由来等は記されていないかった」というとの伝聞を記している。しかしこれは情報提供者の誤解か調査者の聞き誤りであろう。

筆者は、平成一四（二〇〇二）年一月一六日に天狗組合の役員の御厚意で、同組合が保管しているオニツキ箱と呼ばれる、戦前まで使われていた二つの古い箱を調査させていただいた。その結果を簡単に示しておく。

一方の箱書きには「甲午 正徳四歳 新井宿村中／牛頭天王日記／正月十九日」、他方の箱書きには「正徳四歳 新井宿村／水神御日記箱／二月十五日」とある。箱のなかに保管されていた記録は、前者が天王祭祀の毎年の開催記録、後者が水神祭祀の毎年の開催記録であった。いずれの記録も毎年一枚の小さな紙に書かれている。記されている開催月日は、江戸時代のもものはそれぞれいずれも箱書きの月日と同じである。現存する最古の記録は、前者が宝暦一四（一七六四）年、後者が明和五（一七六八）年であった。

この記録は新井宿の儀礼的結合の一端を長きにわたってよく示す、きわめて貴重なものである。しかし開催月日などからみて祇園祭礼とは無関係なものである。また、正徳四（一七一四）年はたんに両祭祀の記録の保管箱が作られた年を意味しているだけである。したがってこの年は天狗組合の発足年ではない。

この年と天狗組合を結びつける要素は見出せない。天狗組合はその名称と役割からみて、新井宿が祇園祭礼に猿田彦を出すようになってから成立したものと考えられる。

現在、天狗組合の当番の引継式が毎年新暦一月一九日におこなわれているが、いつのころからか天王祭祀はこの引継式と一体になったらしい。その結果、前述の誤りが生じたと判断する次第である。

- (16) 「天保」と「嘉永」には、かつては祇園祭礼のさいに天王社の神輿と浜宿の神楽が権之丞宅に入ったこともあるという権之丞家の伝承が記されており、「御遷宮」の但書きの記述にやや対応している。しかし八日市場の獅子の替わりに神輿が入ったことになっている。註(11)で述べたように新宿側にある権之丞家で祇園祭礼の当番がなされたことはなかったが、この伝承が事実とすれば、本田浜宿組の名主であった同家の当主にたいして本宿側の人々が一応の敬意を表したことになる。茂左衛門家にこれらが入ったという記述がないのは、彼が本宿の三組とは無関係だったからであろう。茂左衛門家については但書きのほうにも記述がない。

- (17) 現在の本川岸にはほぼ相当する区域と思われる。

- (18) 「豊秋日記」では常に「だし」と記されているが、以下、引用文を除いて「山車」と記す。

- (19) 伊能忠敬記念館蔵、「日記」、「伊能三郎右衛門家文書」N—一四。

- (20) 伊能忠敬記念館蔵、「日記」、「伊能三郎右衛門家文書」N—一四。

- (21) この条は刊本では略されている。伊能忠敬記念館蔵、「明和七庚寅日記留帳」、「伊能三郎右衛門家文書」N—一五によった。

- (22) 「四組」とあるのは新井宿組を本宿組に含めたうえで、佐原村の全ての組を指しているものであろう。本宿だけでなく、新宿も含めた村の一大事となった様子が窺える。「本宿寺院」は清浄院と勝徳寺と思われる。

- (23) ただし浜宿が前年と同じく芝居山車を出していたとすると、すでに指摘されているように「福原二〇〇—三三」、「忠度桜」は人形浄瑠璃の演目かもしれない。

- (24) 江戸後期（おそらく江戸中期も）の新宿諏訪祭礼では年番制度は採られておらず、下宿組の関戸町が水代触頭として毎年の神幸と数年に一度の練り物巡行とを一手に統括していた。江戸後期の同町は居作町（西関戸）と中郷町（東関戸）に緩やかに分かれていたが、山車は共同で出していた。しかしこの文書を見ると、祭礼の統括は西関戸と東関戸で交替でやっていたのかもしれない。その後、昭和一〇（一九三五）に関戸町は東西に正式に分裂し、同年の諏訪祭礼からそれぞれが山車を出すようになった。

- (25) これは「本宿一四町」の意味であろう。当時の氏子町は「為取替申議定一札事」にあるように一二町であったが、おそらく地頭所では寺宿を上下の二町に、八日市場を八日市場と前原の二町に数え、計一四町としていたものと思われる。
- (26) 「本上川岸区有文書」の一つであるが、ここでは佐原市教育委員会による翻刻の私家版（二〇〇〇年）を利用する。

- (27) この点については本誌収録の筆者の別稿を参照のこと。

- (28) 「本上川岸区有文書」の一つであるが、ここでは佐原市教育委員会による翻刻の私家版（二〇〇〇年）を利用する。

- (29) 「下仲区有文書」一一。下中町で安政四（一八五七）年から昭和一五（一九四〇）年まで書き継がれた記録。

- (30) 「八坂神社沿革と祭事の記録」、「八坂神社文書」六一。

- (31) 明和六（一七六九）年の騒擾を忠敬とともに解決しようとした治郎右衛門は、征後のあとを継いだ息子である「小島一九七八 八六」。

引用および参考文献

- 赤松宗旦 一九三八 『利根川図志』岩波文庫
海上町史編さん委員会編 一九八五 『海上町史 史料編Ⅰ（原始・古代・中世・近世）（一）』海上町役場
香取五郎 一九八七 『佐原本宿牛頭天王祇園祭礼考（伊能豊秋日記より）』『リヴン佐原』一九八七年七月号
香取五郎 一九九七 『笑止千萬言語に絶し申し候』私家版
川口康 二〇〇一 『佐原の歴史』佐原市教育委員会編『佐原山車祭調査報告書』佐原市教育委員会編
小島一仁 一九七八 『伊能忠敬』三省堂
小島一仁 二〇〇〇 『伊能豊秋日記（四）』『伊能忠敬研究』二二
酒井右二 一九八五 『延宝—元禄期における村政機構の整備と村落間結合—下利根川流域根郷五ヶ村組合を事例として—』小笠原長和編『東国の社会と文化』梓出版社
酒井右二 一九八八 『近世中後期在町佐原における伊能家の経営動向』『千葉県の歴史』三五
酒井右二 一九九七 『村政に関する元禄—享保期の記録編纂作業—下総佐原伊能景利の事例から—』『千葉県史研究』五
佐原市教育委員会翻刻 二〇〇〇 『本宿總町事務日誌』私家版
佐原市教育委員会翻刻 二〇〇〇 『諸事記憶録』私家版

- 佐原市教育委員会編 二〇〇一 『佐原山車祭調査報告書』佐原市教育委員会
佐原市史編さん委員会編 一九九六 『佐原市史 資料編 別編一 部冊帳 前巻』
佐原市
佐原市史編さん委員会編 一九九七 『佐原市史 資料編 別編二 部冊帳 後巻
一』佐原市
佐原市史編さん委員会編 一九九八 『佐原市史 資料編 別編三 部冊帳 後巻
二』佐原市
佐原市役所編 一九六六 『佐原市史』佐原市役所
清宮良造 二〇〇三 『定本 佐原の大祭 山車まつり』NPOまちおこし佐原の大
祭振興会
千葉縣史編纂審議會編 一九五七 『千葉縣史料 中世篇 香取文書』千葉縣
千葉縣史編纂審議會編 一九五八 『千葉縣史料 近世篇 下總國上』千葉縣
千葉縣立房総のむら編 一九九二 『町並みに関する調査報告書 第一集 佐原市本
宿の歴史と民俗』千葉縣立房総のむら
福田アジオ 一九九三 『組』下中弘編『日本史大事典 第二卷』平凡社
福原敏男 二〇〇一 『山車祭りの成立と展開』佐原市教育委員会編『佐原山車祭調
査報告書』佐原市教育委員会
八坂神社氏子会 一九八六 『八坂神社行事運営要領』八坂神社氏子会
山本直彦 一九八九 『砂洲上に発達した中世の佐原』三浦茂一編『図説 千葉県の
歴史』河出書房新社
渡辺康代 二〇〇二 『宇都宮明神の「付祭り」にみる宇都宮町人町の変容』『歴史
地理学』二〇八
(国立歴史民俗博物館非常勤研究員、国立歴史民俗博物館共同研究研究
協力者)

(二〇〇五年一月一七日受理、二〇〇五年二月八日審査終了)

The Establishment and Development of a Festival in a Rural Town During the Early Modern Period: on the Case of Honjuku in Sawara-Mura, Shimousa

UNO Kouiti

The village of Sawara in Katori-gun in Shimousa Province prospered through the Edo period as a base for boat transportation along the Tone River. By 1695, the township covered a wide area, making it a rural town, and by 1740 with a population of 3,819 inhabitants it had become one of the leading large settlements in the Kanto region. The village was divided into two parts: Honjuku and Shinjuku. Honjuku was subdivided into three (actually two) social and regional groupings called “kumi”, and “machi”, or local neighborhoods, were formed within these kumi supported by economic development.

This paper presents an example of the Establishment and development of festivals in rural towns during the Early Modern Period using the Gion Festival that was held in Honjuku as an example. Originally, Honjuku did not have any festivals that were large enough to be considered festivals. Two Shinto rituals took place in June by Tenno Shrine, the tutelary shrine for Honjuku. One was the Hamaori ritual, which took place on the foreshore, and the other was the Gion ritual. These rituals were led by prominent residents of Honjuku who were the household heads of two families which played a major role in the two respective kumi. However, in 1703 the two rituals were combined to form a continuous festival to which staying in a temporary shrine and making a circuit of the area with portable shrine (for both the outward procession and the return procession) had been added. This became the Gion Festival.

The Gion Festival developed gradually. Of particular note is the expansion in 1767 of the area covered by the return procession to include all of Honjuku, which was followed the next year by the participation of processions in all the machi that included floats, resulting in a much bigger festival. However, a violent confrontation arose between the machi concerning the order of the procession attached to the parade of portable shrine. Ultimately, one large festival procession was formed in the shape that processions of all the machi led the parade of portable shrine. In the course of this confrontation the various machi freed themselves from the control of the kumi. As a result, by 1822 a system had been established whereby the operation of the two rituals continued to be carried out by prominent villagers while the operation of the two processions was carried out by the machi. Development into the festival by the addition of the parade of portable shrine to the two rituals led by

village leaders with the kumi as a unit saw the machi that had been created in the village assume the role of operating the festival procession.